



*Scaphidium japonicum* Reitter, 1877

## 日本産ベニボタルの同定マニュアル, III

松田 潔

〒 599-8531 大阪府堺市中区学園町 1-1

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科昆虫学研究室

### Identification manual of the lycid-beetles in Japan, III

Kiyoshi MATSUDA

#### はじめに

今回はヒシベニボタル亜科とこの亜科に所属する比較的種数の少ない7属の解説を行った。今回は同亜科の残りの1属、タイプ属であるヒシベニボタル属 *Dictyoptera* について解説を行う。

#### ヒシベニボタル属 *Dictyoptera* Latreille, 1829

タイプ種: *Cantharis sanguineus* sensu Linnaeus, 1761 (= *Pyrochroa aurora* Herbst, 1784) (ヨーロッパ)。

体は中位に大きく、両側がほぼ平行状で、上下に平圧される。頭部は短く、口吻を欠く。複眼は比較的小さい。触角は糸状または弱い鋸歯状で、第2節と第3節が短い。小あごひげ末端節は斧状または長楕円形。下唇ひげ末端節は斧状か三角形。前胸背板は横長で、五角形、隆条により5室に分かれる(図1)。上翅は4本の第1次縦隆線をもち、隆線間は2列の格子状点刻列をそなえる(図2)。雌の腹板末端節は中央に比較的最長い針状突起をもつ。脚は中位の長さで、平圧される。雄交尾器のペニスは多くの種で細長い。側片はペニスよりわずかに短く、基部から先端に向けて徐々に狭まる。基片は比較的大きい。雌交尾器の尾毛は短く、円錐形で、先端が丸くなる。半腹板は長く、基部で幅広く、中央から先端に向けてやや強く狭まる。肛側板は細長い。雌の内部生殖器は中位に長い陰、比較的最長い螺旋形の受精管、紐状の突起を先端に

もつ長卵形の貯精嚢をそなえる。旧北区と新北区、東洋区から15種が記録され、日本からは6種が知られている。

#### 日本産ヒシベニボタル属 *Dictyoptera* の種の検索表

- 1(8) 上翅は赤色または赤褐色、赤色の微毛で被われる。
- 2(3) 前胸背板は赤色、中央に黒斑をもつ。複眼は中位の大きさで、雄の複眼間の距離は複眼長径の約1.5倍。5.3–9.3 mm。本州・四国・九州。  
.....ヒシベニボタル *Dictyoptera gorhami* (Kôno)
- 3(2) 前胸背板は赤色から暗褐色、中央に黒斑をもたない。複眼は小さく、雄の複眼間の距離は複眼長径の約1.8倍より大きい。
- 4(7) 触角第4節の長さは第2節と第3節の長さの和に等しいかそれより短い。
- 5(6) 前胸背板は赤色。小あごひげは短く、その長さは最大幅とほぼ等長。上翅は比較的短く、長さはその幅の約2.9倍。8.4–10.9 mm。南千島；ヨーロッパ・ロシア・アルジェリア・朝鮮半島・カナダ・アメリカ合衆国。.....ミヤマヒシベニボタル *Dictyoptera aurora aurora* (Herbst)
- 6(5) 前胸背板は赤褐色。小あごひげは長く、その長さは最大幅の約1.4倍。上翅は比較的長く、長さはその幅の約3.2倍。6.1–12.4 mm。北海

- 道・本州. ....ミヤマヒシベニボタル日本亜種  
*Dictyoptera aurora hoosana* Matsuda
- 7(4) 触角第4節の長さは第2節と第3節の長さの和より明らかに長い. 5.4-8.3 mm. 北海道・本州・四国. ....ミヤマヒシベニボタル  
*Dictyoptera sapporensis* (Kôno)
- 8(1) 上翅は黒色から黒褐色, 黒褐色または赤色の微毛で被われる.
- 9(10) 前胸背板は赤色または赤橙色, 赤色の微毛で被われる. 6.9-11.0 mm. 本州. ....クロバヒシベニボタル  
*Dictyoptera elegans* Nakane et J. Winkler
- 10(9) 前胸背板は黒色または黒褐色, 暗褐色の微毛で被われる.
- 11(12) 上翅は第1~第4縦隆線の基部1/5~1/2と周縁の隆縁が暗赤褐色から赤色, これらの部分のみ赤色の微毛で被われる. 7.0-12.0 mm. 本州・四国・九州. ....ネアカヒシベニボタル  
*Dictyoptera speciosa* K. Ohbayashi
- 12(11) 上翅は縦隆線と水平の隆線が赤色の微毛で被われる. 5.7-10.0 mm. 北海道・本州. ....アカスジヒシベニボタル  
*Dictyoptera velata* (Gorham)

1. ミヤマヒシベニボタル *Dictyoptera aurora aurora* (Herbst, 1784) (図3, 9, 15, 21, 22)

8.4-10.9 mm. 体は黒色または黒褐色. 頭部・触角・小盾板・脚は黒色または黒褐色. 前胸背板・上翅は赤色. 複眼は小さく, 複眼間の距離は雄で複眼長径の約1.8倍, 雌で約1.9倍. 触角は糸状. 触角第4節の長さは第2節と第3節の長さの和と等長かそれより短い. 小あごひげは斧形. 下唇ひげは三角形で, 前縁は幅広い. 前胸背板は隆条により5室に分かれ, 前縁は幅広く弧状に張出し, 後角はやや角張る. 小盾板は台形で, 先端部は外角が丸くなり, 中央で浅く凹む. 上翅は4本の第1次縦隆線を持ち, 隆線間是不規則な大きさの正方形または長方形からなる2点刻列をそなえる. 後脚転節は三角状に張出し, 後角はやや角張る. 雄交尾器のペニスは細長く, 側片はペニスよりわずかに短く, 幅広い. 基片は大きい. 雌交尾器の尾毛は短く, 円錐状で, 先端に数本の短毛をそなえる. 半腹板は長く, 基部で幅広く, 内側が浅く凹み, 中央から先端に向けてやや強く狭まる. 肛側板は細長い. 7~8月に出現する.

分布: 南千島; ヨーロッパ・ロシア・アルジェリア・朝鮮半島・カナダ・アメリカ合衆国.

[備考] 日本産亜種は *Dictyoptera aurora hoosana* Matsuda, 2011 と名付けられ, 山梨県鳳凰山をタイプ産地として記載された. 分布: 北海道・本州(中部地方以北). 名義タイプ亜種 *D. aurora aurora* とは, 前胸背板が暗色である, 小あごひげが長い, 上翅が長いなどの諸点で区別される. 日本産亜種に関しては, 中根(1969)が指摘するように, 北海道産の個体群は本州産の個体群と形態上よく似るが, 雄交尾器側片先端部の形状が後者とはやや異なる.

2. クロバヒシベニボタル *Dictyoptera elegans* Nakane et J. Winkler, 1952 (図4, 10, 16, 23, 24)

6.9-11.0 mm. 体は黒色から暗赤褐色. 頭部・触角・小盾板・上翅・脚は黒色から暗赤褐色. 前胸背板は赤色または赤橙色, 赤色毛で密に被われる. 複眼は小さく, 複眼間の距離は雄で複眼長径の約1.7倍, 雌で約2.1倍. 触角は糸状. 触角第4節の長さは第2節と第3節の長さの和とほぼ等長かわずかに短い. 小あごひげ末端節は細長い斧形. 下唇ひげ末端節は三角形で, 先端に向かって強く広がる. 前胸背板は隆条により5室に分かれ, 前縁は幅広く弧状に張出すが, 中央でわずかに凹み, 側縁は中央より後方で強く湾入し, 後角はやや角張る. 側方横隆条は弱い. 小盾板は台形で, 先端部は外角が丸くなり, 中央で幅狭く, 深く凹む. 上翅は4本の第1次縦隆線を持ち, 隆線間是不規則な大きい2点刻列をそなえる. 後脚転節は三角形で, 後角は強く突出しない. 雄交尾器は細長い. ペニスは中央で膨らむが, 先端部で細くなる. 側片はペニスよりわずかに短く, 先端部で幅広く丸くなる. 基片は顕著に大きく, 側片とほぼ同じ長さである. 7~8月に出現する.

分布: 本州(関東・中部・関西地方).

3. ヒシベニボタル *Dictyoptera gorhami* (Kôno, 1932) (図5, 11, 17, 25, 26)

5.3-9.3 mm. 体は黒色から暗赤褐色. 頭部・触角・先端部を除く小盾板・脚は黒色から黒褐色. 前胸背板は赤色で, 中央部が暗色になる. 上翅は赤色, 隆線上が赤色毛で密に被われる. 複眼は中位の大きさで, 複眼間の距離は雄で複眼長径の約1.5倍, 雌で約2.4倍. 触角は糸状または弱い鋸歯状. 触角第4節の長さは第2節と第3節の長さの和とほぼ等長かわずかに短い. 小あごひげ末端節は幅広い斧形. 下唇ひげは三角形で, 前縁は幅広く丸くなる. 前胸背板は隆条により5室に分かれ, 前縁は幅広く弧状に張出し, 両側縁は中央後方から基部に向けて広がり, 後角は強く外側に張り出す. 小盾板

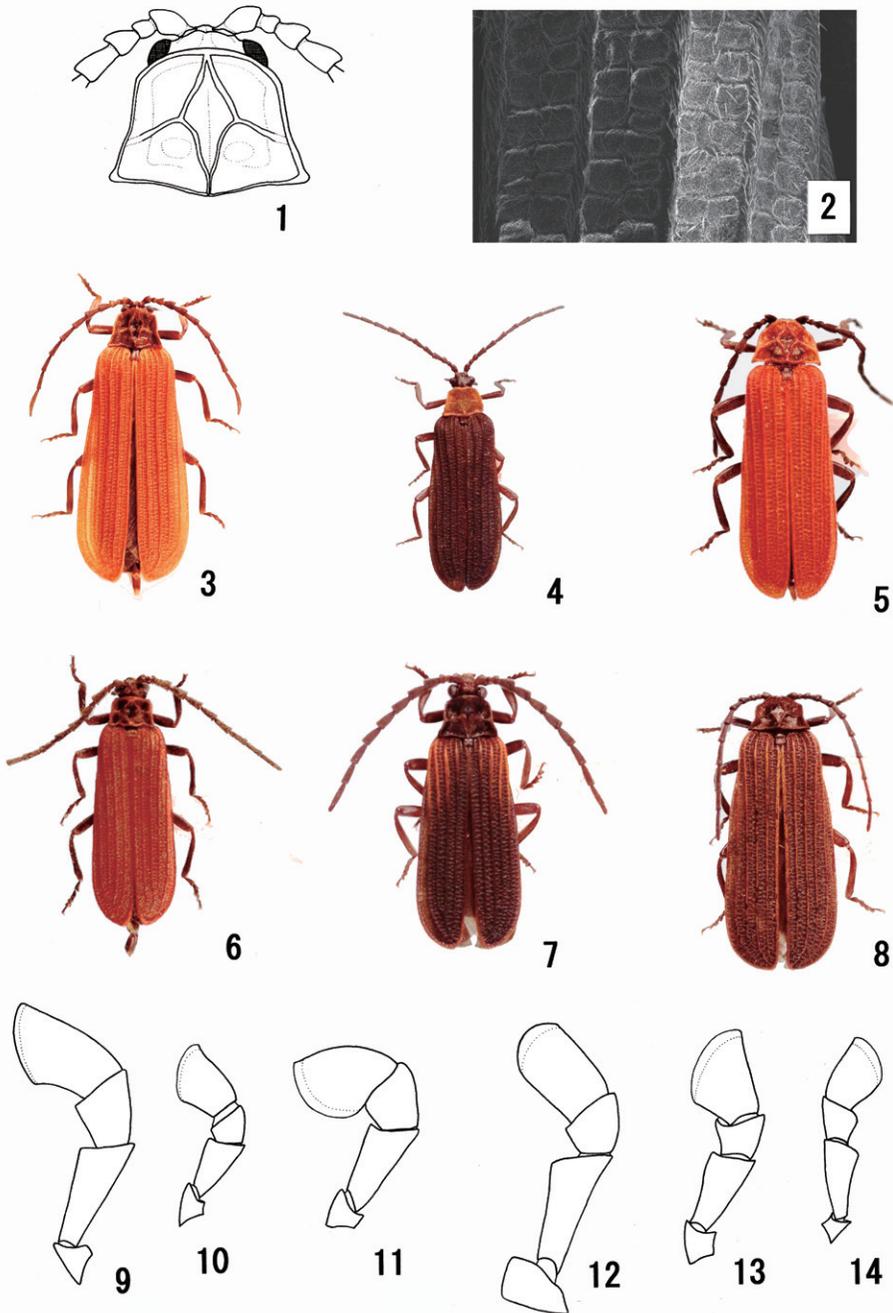


図1-2. ヒシベニボタル属 (ミヤマヒシベニボタル) の頭部・前胸背板 (1) と上翅 (2) . 図3-14. ヒシベニボタル属の背面図 (3-8) および小あごひげ (9-14) . 3, 9, ミヤマヒシベニボタル; 4, 10, クロバヒシベニボタル; 5, 11, ヒシベニボタル; 6, 12, ミヤビヒシベニボタル; 7, 13, ネアカヒシベニボタル; 8, 14, アカスジヒシベニボタル.

は台形で、先端部は外角がわずかに丸くなり、中央で幅広く、浅く凹む。上翅は4本の第1次縦隆線をもち、隆線間は不規則な大きい2点刻列をそ

なえる。後脚転節は三角状で、後角は鋭く突出する。雄交尾器のペニスは細長い。側片は細長く、先端部は鋭く突出する。基片は他の種と比べて小さい。

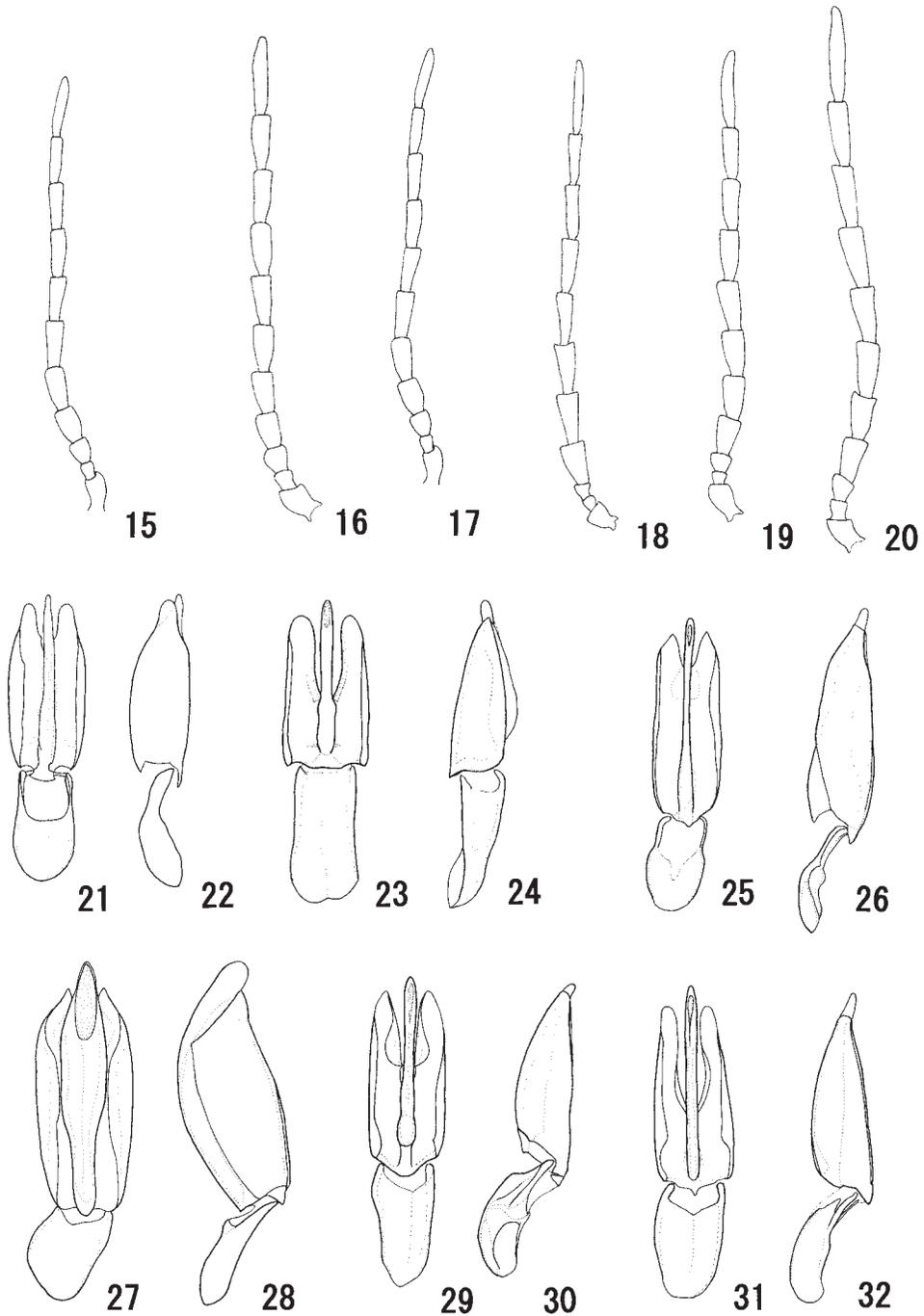


図15-32. ヒシベニボタル属の触角 (15-20) , および雄交尾器 (21-32; 21, 23, 25, 27, 29, 31 : 腹面; 22, 24, 26, 28, 30, 32 : 側面) . 15, 21, 22, ミヤマヒシベニボタル; 16, 23, 24, クロバヒシベニボタル; 17, 25, 26, ヒシベニボタル; 18, 27, 28, ミヤビヒシベニボタル; 19, 29, 30, ネアカヒシベニボタル; 20, 31, 32, アカスジヒシベニボタル.

4～6月に出現する。

分布：北海道・本州・四国・九州・南千島；ロシア・中国・朝鮮半島・台湾。

[備考] 本種は Gorham (1883) が *Eros erythropterus* の学名で記載したが、この学名が Baudi di Selve (1871) によりロシア極東地域から記載された種 (現

在はチュウゼンジベニボタル属の一種、アムールチュウゼンジベニボタル *Xylobanellus erythropterus*) のホモニム (異物同名) であることが判明したので、Kôno (1932) により置換名として現在の学名が与えられた。

ヒシベニボタルは、前回解説したアカミスジヒシベニボタル *Lateralis oculatus* とメダカヒシベニボタル *Punicealis medvedevi* の2種に外見上よく似るが、後脚転節が短い、上翅点刻内に微毛が少ないなどのヒシベニボタル属に共通する特徴をもつので、これらの種から容易に区別することができる。

#### 4. ミヤビヒシベニボタル *Dictyoptera sapporensis* (Kôno, 1932) (図6, 12, 18, 27, 28)

5.4–8.3 mm. 体は黒褐色から暗赤褐色。頭部・触角・先端部を除く小盾板・脚は黒色または黒褐色。前胸背板は暗褐色で、隆起縁と隆条が明赤褐色。上翅は赤色、赤色毛で被われる。複眼は小さく、複眼間の距離は雄で複眼長径の約2.1倍、雌で約2.5倍。触角は糸状。触角第4節の長さは第2節と第3節の長さの和より明らかに長い。小あごひげ末端節は細長い斧形。下唇ひげは斧形で、先端に向かって広がる。前胸背板は隆条により5室に分かれ、前縁はほぼ直線状、側縁は中央でわずかに湾入し、後角は強く突出せず、先端で丸くなる。小盾板は台形で、先端部は外角がやや丸くなり、中央で浅く凹む。上翅は4本の第1次縦隆線を持ち、隆線間是不規則な大きい2点刻列をそなえる。後脚転節の先端部は三角状に張出し、後角は鋭く突出しない。雄交尾器のペニスは基部から前方に向けて徐々に幅広くなり、先端部で急に狭まる。側片は幅広く、側面から見て、先端部は斜めに裁断される。基片は比較的大きい。5月に出現するが、少ない。

分布：北海道・本州・四国。

[備考] 本種の学名として、以前は *Dictyoptera ohbayashii* Nakane, 1969 が用いられたが、Kazantsev (1993) の研究により、この種が *Dictyopterus (Dictyopterus) sapporensis* Kôno, 1932 と同一の種であることが判明し、それ以後、前者は後者のシノニム (同物異名) として扱われている。

#### 5. ネアカヒシベニボタル *Dictyoptera speciosa* K. Ohbayashi, 1954 (図7, 13, 19, 29, 30)

7.0–12.0 mm. 体は黒色から黒褐色。頭部・触角・前胸背板・小盾板・脚は黒色または黒褐色。上翅は黒色で、第1～第4の縦隆線の基部 1/5–1/2 と周縁の隆縁は暗赤褐色から赤色、赤色毛で被われる。複眼は中位の大きさで、複眼間の距離は雄で複眼

長径の約1.5倍、雌で約1.7倍。触角は糸状。触角第4節の長さは第2節と第3節の長さの和より長い。小あごひげ末端節は斧形。下唇ひげは斧形で、前縁が幅広く丸くなる。前胸背板は隆条により5室に分かれ、前縁は幅広く弧状に張出し、両側縁は中央より基部に向けて徐々に広がり、後角はやや角張る。小盾板は台形で、先端部は外角が丸くなり、中央で逆V字形に凹む。上翅は4本の第1次縦隆線を持ち、隆線間是不規則な大きい2点刻列をそなえる。後脚転節は三角状で、後角は鋭く突出しない。雄交尾器のペニスは細長く、側片は先端に向けて徐々に狭まり、基片は大きい。6～7月に出現する。

分布：本州・四国・九州。

#### 6. アカスジヒシベニボタル *Dictyoptera velata* (Gorham, 1883) (図8, 14, 20, 31, 32)

5.7–10.0 mm. 体は黒色から暗赤褐色。頭部・触角・前胸背板・小盾板・脚は黒色または黒褐色。上翅は黒色、周縁と4本の第1次縦隆線が少し淡色になり、これらと第2次縦隆線および小室を囲む水平の隆線は赤色の微毛で被われる。複眼は中位の大きさで、複眼間の距離は雄で複眼長径の約1.4倍、雌で約2.0倍。触角は糸状。触角第4節の長さは第2節と第3節の長さの和より長い。小あごひげ末端節は長い斧形。下唇ひげ末端節は三角形で、前縁は幅広く丸くなる。前胸背板は隆条により5室に分かれ、前縁は幅広く弧状に張出し、両側縁は中央後方から基部に向かって徐々に広がり、後角は強く側方に張り出す。小盾板は台形で、先端部は外角が丸くなり、中央で逆V字形に凹む。上翅は4本の第1次縦隆線を持ち、隆線間是不規則な大きい2点刻列をそなえる。後脚転節は三角状で、後角は幅広く丸くなる。雄交尾器は細長い。ペニスは細長く、側片よりわずかに長い。側片は中央から前方に向けて狭まり、先端部は側面から見て、ほぼ水平に裁断される。基片は比較的大きい。7～8月に出現する。

分布：北海道・本州・南千島 (国後島)。

[備考] 本種は神戸麻耶山で G. Lewis が採集した1雌に基づいて記載されたが、それ以後の西日本からの記録はないようである。本州では中部以北に広く分布する。

#### 引用文献

- Baudi di Selve, F., 1871. Europeae et circummediterraneae faunae Dascillidum et Malacodermatum specierum, quae Comes Dejean in suo Catalogo ed.3 consignavit, ex ejusdem collectione in R. Taurinensi Musaeo asservata, cum

- auctorum hodiernae recepta denominatione, collatio. Berliner Entomologische Zeitschrift, 15 : 89–130.
- Bocáková, M. & L. Bocák, 2007. Lycidae, In: Catalogue of Palaearctic Coleoptera, Vol. 4, Elateroidea-Derodontoidea-Bostrichoidea-Lymexyloidea-Cleroidea-Cucujoidea, edited by I. Löbl & A. Smetana, Apollo Books, Stenstrup. 935 pp.
- Gorham, H. S., 1883. Revision of the genera and species of malacoderm Coleoptera of the Japanese Fauna. Part, I. – Lycidae, Lampyridae. Transactions of the Entomological Society of London, 1883: 393–411.
- Herbst, J. F. W., 1784. Kritisches Verzeichniss meiner Insectensammlung. Archiv der Insectengeschichte 5. J. C. Fuessly, Zürich: 73–151.
- Kazantsev, S. V., 1993. Novye i maloizvestnye vidy Zhukov-krasnokrylov (Coleoptera, Lycidae) s Dal'nego Vostoka Rosii i Japonii. Entomologicheskoe Obozrenie, 72: 100–105.
- Kazantsev, S. V., 1995. Novye dannye po rosiyskoy faune krasnokrylov (Coleoptera, Lycidae). New data on the Russian fauna of Lycidae (Coleoptera). Zoologicheskii Zhurnal, 74(5): 35–44.
- Kazantsev, S. V., 2004. Phylogeny of the tribe Erotini (Coleoptera, Lycidae), with descriptions of new taxa. Zootaxa, 496: 1–48.
- Kleine, R., 1933. Lycidae, Coleopterorum Catalogus, edited by S. Schenkl, Pars 128, W. Junk, Berlin. 145 pp.
- Kleine, R., 1942. Bestimmungstabelle der Lycidae. Bestimmungstabellen der europäischen Coleopteren, 123. 90 pp.
- Kôno, H., 1932. Beitrag zur Lyciden-Fauna Japans. Insecta Matsumurana, 7 (1/2): 54–64.
- Latreille, P. A., 1829. Crustacés, arachnides et partie des insectes. In : Cuvier. Le Regne animal distribué d'après son organization pour de base à l'histoire naturelle des animaux et d'introduction à l'anatomie comparée. Nouvelle édition, revue et augmentée. Tome IV. Paris. 584 pp.
- Matsuda, K., 2011. Taxonomic notes on the lycid-beetles (Coleoptera: Lycidae) from Japan, III. - Eight new taxa of the tribe Dictyopterini from Japan. Entomological Review of Japan, 65: 303–332.
- 松田 潔, 2011a. コクロハナボタル亜科. 日本産ベニボタルの同定マニュアル, I. さやばねニューシリーズ, (4): 1–4.
- 松田 潔, 2011b. ヒシベニボタル亜科 1. 日本産ベニボタルの同定マニュアル, II. さやばねニューシリーズ, (5): 1–10.
- Medvedev, L., 1966. Fauna Lycidae (Coleoptera) Kurilskikh ostrovov. In: Entomofauna lesov Kurilskikh ostrovov, poluostrova Kamchatki i Magadanskoj oblasti. Moskva, L. Nauka: 34–38.
- Nakane, T., 1969. Lycidae (Insecta, Coleoptera), Fauna Japonica. Academic Press of Japan, Tokyo. 224 pp.
- Nakane, T. & J. R. Winkler, 1952. *Dictyoptera elegans* n. sp. Časopis Československé Společnosti Entomologické, 49: 133–135.
- Ohbayashi, K., 1954. Five new species of Lycidae from Japan (Coleoptera). Mushi, 26(6): 19–22.
- 佐藤正孝・松田 潔, 1985. ベニボタル科, 「原色日本甲虫図鑑 III」, 保育社 : 93–94, 103–104.

(2012年5月15日受領, 2012年5月24日受理)

### 【短報】ヒラノコギリホソヒラタムシの徳之島からの記録

ヒラノコギリホソヒラタムシ *Silvanopsis simoni* Grouvelle, 1982 はかなり少ない種のように、その分布は平野 (2010) によると本州, 沖縄本島, 西表島, 台湾, 中国, ベトナム, フィリピン, 東南アジア, インド, スリランカである。筆者は徳之島で採集しているので新分布記録として、また、田中勇氏の標本箱より沖縄本島産の本種を見出したので、沖縄本島の追加記録として併せて報告する。

1ex., 鹿児島県大島郡天城町天城岳, 21. VI. 2006, 筆者採集。

2exs., 沖縄県南城



図1. 徳之島産ヒラノコギリホソヒラタムシ。

市玉城城跡付近, 10. V. 2008, 田中勇採集。

徳之島産は天城岳登山口付近の畑の畔道でのナイターに飛来したものであるが、沖縄本島産の個体は採集者の田中勇氏によれば、2か所の竹林で、竹のアブラムシにくるテントウムシ類狙いで、親指ほどの太さの竹を強く叩いて得たという。本種は何らかの形で竹に依存している可能性が考えられる。

末筆ながら、沖縄本島産の記録の発表を快諾された田中勇氏に感謝する。

### 引用文献

平野幸彦, 2010. 日本産ヒラタムシ上科図説, 第2巻. 61 pp., 昆虫文献 六本脚.

(田中 稔 663-8002 西宮市一里山町 19-18)

# 日本産ビロウドコメツキダマシ属の3種について

鈴木 互

〒 211-0031 神奈川県川崎市中原区木月大町 6-1 法政大学第二高等学校生物科  
(wsuzuki@hosei2.ed.jp)

## Notes on three species of the genus *Galbites* Fleutiaux (Coleoptera, Eucnemidae) from Japan

Wataru SUZUKI

Summary: Three species of the genus *Galbites* Fleutiaux are recognised from Japan: *G. australiae* (Lea), *G. borealis* (Hisamatsu) and *G. tomentosa* (Montrouzier). *G. tomentosa* is recorded from Japan for the first time. The mature larva of *G. borealis* is described and illustrated based on four specimens collected from somewhat decayed log of *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg. (Euphorbiaceae) in Miyazaki Prefecture. A key to species of the genus *Galbites* from Japan is provided.

ビロウドコメツキダマシ属 *Galbites* は、日本から東南アジアそしてオセアニア地域にかけて広い分布域をもつグループで、これまでに 30 種が確認されている (Muona, 1991)。体は厚みのある卵形もしくは円柱形を呈し、体を被う毛の色や毛並みは変化に富むことがよく知られている。触角は雌雄ともに強く鋸歯状~櫛歯状を呈し、前胸背板には瘤状の隆起をともなうことが多い。

日本からは、ビロウドコメツキダマシ *G. australiae* (Lea, 1919) とクロビロウドコメツキダマシ *G. borealis* (Hisamatsu, 1980) の 2 種がこれまでに知られているが (Hisamatsu, 1980; 久松, 1985), 材採取以外での採集記録はほとんど見当たらない。

筆者は、日本のコメツキダマシ科の研究を現在進めているが、その過程で日本から記録のなかったチャイロヒゲビロウドコメツキダマシ *G. tomentosa* (Montrouzier, 1855) を奄美大島の林内で得ることができた。また、これまで明らかではなかったクロビロウドコメツキダマシの幼虫も調査することができた。この機会にこれらを図示し、日本産の本属について簡単に解説したい。

本稿を草するにあたり、標本その他でお世話になった、都城市の木野田毅氏、東京都の新里達也博士、宮崎市の笹岡康則氏、奄美大島での採集についてご教示いただいた久留米市の野田亮氏ならびに九州大学の有本晃一氏、日本における本属の記録についてご教示いただいた東京都の関章弘氏、文献でご協力いただいた川崎市の川田一之氏に厚くお礼申し上げる。

なお、本研究の一部は、法政大学付属中・高等学校国内研究員制度による支援を受けたものである。

## コメツキダマシ亜科 EUCNEMINAE ビロウドコメツキダマシ族 *Galbitini* Muona, 1991

### ビロウドコメツキダマシ属 *Galbites* Fleutiaux, 1918

*Galba* Latreille, 1829: 451 (not *Galba* Schrank, 1803).  
*Galbites* Fleutiaux, 1918: 59. [Replacement name for *Galba* Latreille]. Type species: *Galba marmorata* Guérin-Méneville, 1838.

コメツキダマシ科は形態がよく似たものが多いが、ビロウドコメツキ属 *Galbites* は、跗節第 2~4 節下面に明瞭な葉状片を備えることで、日本に生息する他のコメツキダマシとの識別は容易である。

本属は、頭部の中央隆起線や縦溝の状態、上翅の条線や間室の状態、そして毛の密度や流れる方向などの特徴により、9 種群に分けられる (Muona, 1991)。今回確認された日本産の 3 種は、それぞれ後述する別々の種群に所属する。

成虫は、よく飛び回り、新鮮な切り株、伐採木、朽ちた倒木などに集まり、衝突板トラップ (FIT) や灯火で採集される。コメツキダマシが飛び跳ねることは、よく知られているが、本属においても、ビロウドコメツキダマシ *G. australiae* とチャイロビロウドコメツキダマシ *G. tomentosa* の 2 種が室内条件下において飛び跳ねることが観察がされている (Muona, 1991)。

本属の幼虫については、Gardner (1936) がインド (ベンガル地方) においてトウダイグサ科オオハギ属の *Macaranga denticulata* の倒木から見いだされた *Galbites samuelsoni* Muona ("Pterotarsus

*fulvus* Fleutiaux"として)の幼虫に基づいて、気門の形状を図示し、簡単な記載をしている。このGardner (1936)の記載によると、幼虫の形態は、*Galbimorpha agastoceroideis* Fleutiaux に似るが、前胸腹板の各褐色線状斑後方に四角い褐色斑が存在する点が異なる。

#### 日本産ビロウドコメツキダマシ属の種の検索表

1. 触角は第3節が台形で、4節より櫛歯状となる。前胸背板の瘤状隆起は不明瞭(Fig. 11).....チャイロヒゲビロウドコメツキダマシ
  - 触角は第3節より強く櫛歯状となる。前胸背板には明瞭な瘤状隆起がある.....2
2. 体は地肌が暗褐色であるが、黄褐色の毛で密に被われ、ビロード状となる。頭部は正中線に沿って深い縦溝がある。前胸背板基部中央には瘤状隆起を欠き、短い縦の稜線を構える(Fig. 1) .....ビロウドコメツキダマシ
  - 地肌は黒色で、黒と黄白色の繊細な毛でおおわれる。頭部は正中線に沿った1本の隆起線がある。前胸背板基部中央の瘤状隆起は大きく顕著である(Fig. 2).....クロビロウドコメツキダマシ

#### *Galbites australiae* (Lea, 1919)

##### ビロウドコメツキダマシ (Fig. 1)

*Galba australiae* Lea, 1919: 741-742 (Australia: Coen River in Queensland).

*Pterotarsus Mouhoti* Fleutiaux, 1924: 303, 205-306 (Tonkin & Laos). (Synonymized by Muona, 1991: 29).

*Pterotarsus mouhoti*: Hisamatsu, 1980: 30, fig. 4 (Japan: Mt. Hateruma in Iriomote Is.); 久松, 1985: 46, pl. 9, fig. 1.; 鈴木, 1998: 8 (Japan: Komi in Iriomote Is.).

*Pterotarsus bakeri* Fleutiaux, 1926, 36, 37 (Mt. Makiling, Sibuyan, Celebes). (Synonymized by Muona, 1991: 29).

*Galbites australiae*: Muona, 1991: 29, figs. 30, 47-48, 70-80 (Bhutan, Philippines, Papua New Guinea, Australia, Solomon Is.).

体長: 9.0 mm; 幅: 3.0 mm.

形態: 体は長楕円形で、後方は徐々に狭くなる。体は褐色で、頭部と前胸背板はやや暗色となる。

触角第2節以降と脚は赤褐色。表面は金色の寝た毛でやや密に被われ、上翅では複雑な毛並み模様を形成する。触角第2節は倒三角形状で、3節よりわずかに短い程度。上翅条線は、大型の点刻列により形成される。間室は平らで、細かい点刻を

装う。

検視標本: 1♂, 沖縄県西表島古見, 1-7. VI. 1998. 本個体は、樹種不明の材から羽化脱出したものである。

分布: 日本(西表島); ブータン, インド(アンダマン), タイ, ラオス, ルソン島, シブヤン島, ミンダナオ島, バジラン島, スマトラ島, ジャワ島, スラウェシ島, ニューギニア島, ニューブリテン島, ソロモン諸島, オーストラリア。

生態: オーストラリア北部で採取した硬い材から本種が、チャイロヒゲビロウドコメツキダマシ *G. tomentosa* や多数のミツギリゾウムシとともに脱出したという報告があるが、詳しい生態については不明である(Muona, 1991)。

備考: 本種を日本から最初に記録したのは、Hisamatsu (1980) である。Hisamatsu (1980) は、西表島の波照間山で採集された1雄個体を写真をつけて紹介し、学名には *Pterotarsus mouhoti* を当てた。久松 (1985) は、図鑑の中で再度本種について触れ、展足し直した同個体を原色で紹介した。その後は、国内の記録はほとんどなく、わずかに鈴木 (1998)



Fig. 1. *Galbites australiae* (Lea, 1919) from Iriomote-jima Is., Okinawa Pref., Japan, ♂.

が同じ西表島から1個体を記録しているに過ぎない。

Muona (1991) は、ピロウドコメツキダマシ族をまとめた際、*Pterotarsus mouhoti* は *P. bakeri* とともに本種 *G. australiae* の新参シノニムとしている。

本種は体全体に毛が密生すること、頭部中央に隆起線をもつこと、そして上翅基部1/3の第1間室では毛が外側に向く特徴をもつことから、*auricolor* 種群に含まれる。

***Galbites borealis* (Hisamatsu, 1980)**

クロピロウドコメツキダマシ (Figs. 2, 5-9)

*Pterotarsus borealis* Hisamatsu, 1980: 27 (Japan: Yakushima Is.; Taiwan: Nanshanchi in Nantou Hsien); 久松, 1985, 46, pl. 9, fig. 2.; 中根, 1987: 6 (Japan: Onoaida in Yakushima Is.); 鈴木, 2001: 51 (Taiwan: Senpei in Kaohsiung Hsien); 田中, 2005: 22 (屋久島栗生); 笹岡・木野田, 2010 (Japan: Kawaminamichô in Miyazaki Pref.).

*Galbites borealis*: Muona, 1991: 18.



Fig. 2. *Galbites borealis* (Hisamatsu, 1980) from Miyazaki Pref., Kyushu, Japan, ♂.

体長: 4.5-12.0 mm; 幅: 2.0-4.0 mm.

形態: 体は長楕円形で、両側はほぼ並行状。地肌は黒褐色~黒色。跗節は赤褐色。体は全体に黒や暗褐色の微毛で被われるが、疎らで、微毛同士が重なり合うことはない。頭部は正中線に沿って、顕著な縦溝をもつ。触角は第1節が長く、2-5節を合わせた長さとはほぼ等しい。第2節は短く、外縁は鋭く突出し、先端は鋭く尖る。上翅は全体が粗雑に点刻され、条線は不明瞭。雌雄の形態はともによく似るが、雄は一般により小型で、前胸背板は前方に向かって明らかに狭くなる。

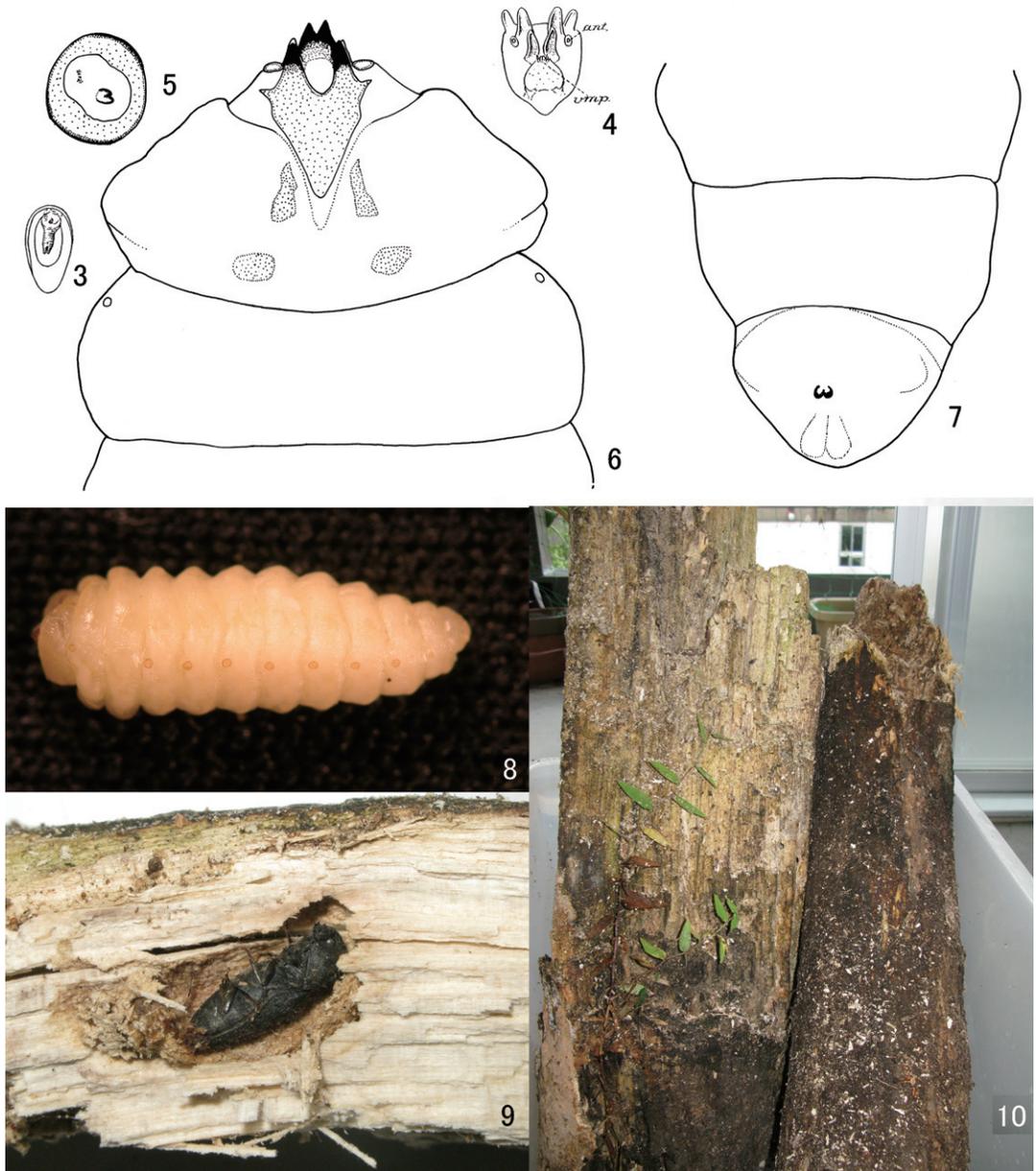
検視標本: 1♀, 台湾省高雄県扇平, 21. III. 1980, 新里達也採集; 3 exs., 宮崎県児湯郡川南町, 2008 年秋, 笹岡康則 (材採集), 25. III. 2009 (羽化脱出) (木野田毅保管); 2exs., 同地, 28. V. 2009, 笹岡康則採集 (木野田毅保管); 30 exs., 同地, 19. X. 2009, 木野田毅・笹岡康則 (材採集), 13. II.-13. III. 2010 (川崎市の屋内で羽化脱出); 4 exs. (幼虫), 同地 (同材中より検出)。

分布: 日本 (九州 [宮崎県], 屋久島); 台湾。

食樹: 田中 (2005) は屋久島で採取した枯材から多数の本種個体が羽化脱出したことを報告しているが、樹種については特定されていない。今回、多くの成虫と幼虫を見いだすことができた宮崎県の材は、筆者自身では樹種を特定できなかったが、その後の笹岡康則・木野田毅両氏による現地での再調査により、樹種がアカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg. (Euphorbiaceae) であることが判明した。

老熟幼虫: 体長 7.5-8.9 mm; 幅 1.9-2.8 mm. 体はやや長い紡錘形で、全体に厚みがある。体幹部は淡黄色~乳白色であるが、口器は暗褐色で、気門は茶褐色 (Fig. 8) となる。体は後胸部で最も幅広となる。複眼、単眼、触角、胸脚を欠く。口器は、他のコメツキダマシ同様に単純化し、棘状となる (Fig. 6)。腹部は全体に一樣で、腹面にも背面にも他のコメツキダマシの幼虫で見られるようなピロウド状の斑紋、環状斑、小紋を欠く。胸部第2節と腹部第1-8節の両側には明瞭な気門を備える。気門は直径約 1 mm のほぼ円形で、環状に節片化する (Figs. 5 & 8)。腹部第8節の気門は、他に比べ小さく、その直径は前節気門の 2/3 程度。肛門には上側に数字の「3」を横倒したような節片部を備える (Fig. 7)。

本種の幼虫の形態は、*Galbiomorpha agastoceroides* Fleutiaux の幼虫にやや似るが、胸部腹面の線状斑の後方に斑紋を持つことや口器腹面の構造において違いが認められた (Figs. 4 & 6)。また、同属の



Figs. 3-8. Larvae of *Galbites* and *Galbiomorpha*. - 3, *Galbites samuelsoni* Muona, spiracle; 4, *Galbiomorpha agastoceroides* Fleutiaux, mouthparts, ventral view. 5-8, mature larva of *Galbites borealis* (Hisamatsu), from Miyazaki Pref., Japan, - 5, spiracle of the 1st abdominal segment; 6, head and thorax, ventral view; 7, 7-9th abdominal segments, ventral view; 8, habitus, ventro-lateral view. (Figs. 3 & 4: after Gardner, 1935).

Fig. 9. An adult male of *Galbites borealis* (Hisamatsu) in pupal chamber (lateral view).

Fig. 10. Host of *G. borealis* (Hisamatsu). Somewhat decayed log of *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg. (Euphorbiaceae).

*Galbites samuelsoni* Muona とは、気門 (Fig. 5) の形状がほぼ円形に近い (後者は楕円形: Fig. 3) ことから区別できる。

生態: 今回、多くの個体が羽化脱出したアカメガシワの材 (Fig. 10) は、直径 20-25 cm、木の根元に近い部分 (60cm×2 本) であった。材の状態は

やや朽ちており、材部は菌糸に侵された状況が見られた。樹皮はぼろぼろに近い状態で、ところどころ剥がれていた。材の表面には本種のものと思われる脱出孔が多数観察され、材を採取した以前にも多くの個体が本材から発生していた状況が推測された。脱出孔の直径は 2.5-5.0 mm で、脱出孔

から蛹室に至る坑道は幹側面からほぼ直角にのびていた。

材の一部を割り確かめたところ、樹皮から6-8 mmの深さのところに、やや湾曲した長楕円形の蛹室が観察された。蛹室の長さは約15 mm、直径は約5 mm、幹側面とほぼ平行に位置し、その中で成虫が頭部を上にした状態で観察された (Fig. 9)。蛹室の底には木くずが詰められ、その上には幼虫と蛹の脱皮殻が認められた。

10月から神奈川県川崎市にある学校校舎室内で、半透明のポリプロピレンの衣装ケースに入れ、材を垂直に立てた状態で放置しておいたところ、2月13日に最初の成虫が材から脱出し、3月13日までの一ヶ月間に、30頭を超える個体が出現した。材の外に出てきた個体は、材の上に止まってじっとしていることが多かったが、加温した室内に移したり、ライトを当てたりして温めてやると活発に動き回り、翅を広げて飛ばうとするなどの行動が観察された。ただ、本属の他種で観察されているような、パチンと飛び跳ねる行動は、残念ながら観察することはできなかった。

備考：Muona (1991) は、本種を Hisamatsu (1980) の原記載を基に *Galbites* 属に移した際、アンボン島から記載された *G. tuberculata* (Redtenbacher, 1867) のシノニムである可能性があることを指摘している。筆者は、東南アジアに広く分布する *G. tuberculata* の標本と今回得られた多数のクロビロウドコメツキダマシの標本を比較した結果、体形等の特徴に大きな違いが認められた。そのため、日本および台湾に分布するクロビロウドコメツキダマシについては、*G. tuberculata* とは区別し、従来通り独立種として扱うことにした。

なお、本種は、頭部中央の隆起線を欠くこと、上翅第1, 3, 5間室が鈍く隆起する (顕著ではない) 特徴をもつことから、*tuberculata* 種群に含まれる。

#### *Galbites tomentosus* (Montrouzier, 1855)

チャイロヒゲビロウドコメツキダマシ (Fig.11)  
*Galba tomentosus* Montrouzier, 1855: 13 (Papua New Guinea).

*Pterotarsus tomentosus*: Fleutiaux, 1947: 16 (in key), 17 (Tonkin).

*Galbites tomentosus*: Muona, 1991: 21-22. figs. 28, 43, 73 (Australia, Taiwan, Jawa, Sulawesi, Malay peninsula, Sabah, Papua New Guinea, Solomon Isls.).

体長：9.0 mm; 幅：3.0 mm.

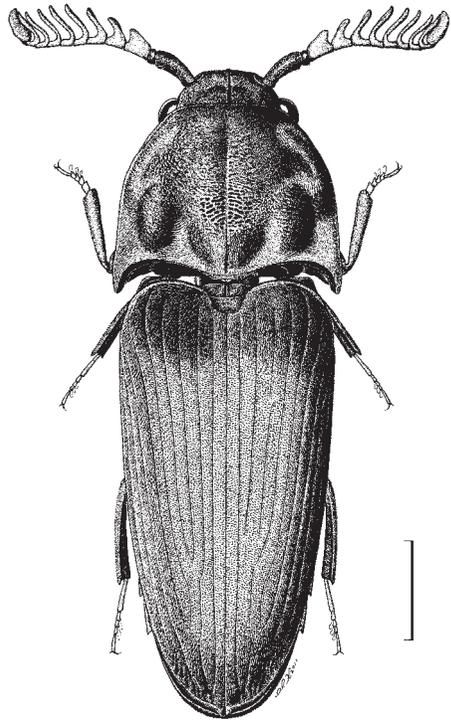


Fig. 11. *Galbites tomentosus* (Montrouzier, 1855) from Amami-Ōshima Is., Japan, ♂. Scale: 1.5 mm.

形態：体は長楕円形であるが、後方に向かって狭くなる。体は全体が黒褐色であるが、第3節以降の触角および跗節は赤褐色となる。体は黄褐色の寝ている短毛で様に被われる。頭部は正中線に沿って、明瞭な縦隆線を備える。触角第1節は第2-4節を合わせた長さにはほぼ等しい。触角第2節は短小で、外縁部にはいかなる突起も持たない。第3節は鋸歯状を呈するが、先端は強く丸まる。上翅条線は深く、明瞭。間室は平らで、やや粗雑に点刻される。中・後脛節先端外縁はやや尖る。

検視標本：1♂, Naze-Chinaze, Amami City, Amami-Ōshima Is., Kagoshima Pref., Japan, 31. VII. - 1. VIII. 2011, W. Suzuki Leg. (FIT).

本個体は、なだらかな尾根筋の林床に設置した4Wのブラックライト付FITにより得られたものである。

分布：日本 (奄美大島 [日本初記録]); 台湾, インドシナ半島, マレー半島, ボルネオ島, ジャワ島, パプアニューギニア, オーストラリア, ソロモン諸島。

備考：本種は体全体が均一の毛で被われること

や、上翅条線が肩部も含め明瞭である特徴をもつことから、本種1種からなる *tomentosa* 種群に含まれる。

#### 引用文献

- Fleutiaux, E., 1924. Remarques sur les especes du genre *Pterotarsus* Guérin (Coleoptera, Melasidae). Annales de la Société Entomologique de France, Paris, 92: 301–309.
- Fleutiaux, E., 1926. Catalogue raisonné des Melasidae des Iles Philippines. Annales de la Société Entomologique de France, Paris, 95: 29–90.
- Fleutiaux, E., 1947. Révision des Eucnémides (Coléoptères) de l'Indochine française. Notes d'Entomologie Chinoise, Changhai, 11: 1–68.
- Gardner, J.C.M., 1936. Immature stages of Indian Coleoptera (17) (Eucnemidae). Indian Forest Records, N. S., 1(4): 79–93, pls. I–II.
- Hisamatsu, S., 1980. The genus *Pterotarsus* Guérin-Ménéville in Japan (Coleoptera, Eucnemidae). Transactions of the Shikoku Entomological Society, Matsuyama, 15(1–2): 27–30.
- 久松定成, 1985. コメツキダマシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著, 原色日本甲虫図鑑 (III) pp. 42–51 (pls. 8–9). 保育社, 大阪.

- Lea, A.M., 1919. Descriptions of new species of Australian Coleoptera. Part xiv. Proceedings of the Linnean Society of New South Wales, Sydney, 43: 715–746.
- Montrouzier, P., 1855. Essai sur la faune de l'île de Woodlark ou Moïou. Annales des Sciences Physiques et Naturelles d'Agriculture et d'Industrie, Lyon, 7(1): 1–70.
- Muona, J., 1991. A revision of the Indomalasian tribe Galbitini new tribe (Coleoptera, Eucnemidae). Entomologica Scandinavica, Supplement, (39): 1–67, 138 figs.
- 中根猛彦, 1987. クシヒゲチャイロコメツキダマシの記録. 北九州の昆虫, 34(1): 6.
- 笹岡康則・木野田毅, 2010. クロビロウドコメツキダマシの宮崎県の記録. 月刊むし, (467): 40.
- 鈴木 互, 1998. 生木から脱出したピロウドコメツキダマシ. 甲虫ニュース, (123): 8.
- 鈴木 互, 2001. 台湾におけるクロビロウドコメツキダマシの記録. 月刊むし, (360): 51.
- 田中 稔, 2005. クロビロウドコメツキダマシ屋久島の記録. 甲虫ニュース, (151): 22.

(2012年5月18日受領, 2012年5月22日受理)

#### 【短報】鹿児島県喜界島で採集されたアマミヒゲコメツキ

喜界島は、奄美群島の北東部に位置する島で、これまでに8種のコメツキムシが確認されている(岸井, 1999; 今坂・祝, 2007). 最近筆者は、青木淳一博士が喜界島で採集されたコメツキムシの標本の中から、これまで同島から記録のなかったアマミヒゲコメツキ *Pectocera amamiinsulana* Nakane, 1957 を見いだすことができたので、ここに記録しておきたい。

1♂, 鹿児島県大島郡喜界町(喜界島)裏原～花良治, 4. III. 2012, 青木淳一採集(筆者保管).

本種はこれまでに奄美大島と徳之島から記録があるが、徳之島のものは、細い体形、長い触角、不明瞭な上翅斑紋、短い雄交尾器側片先端部など、基亜種と異なる特徴をもつことから Kishii (1996) により別亜種 *P. a. ogatai* に区別されている。

今回得られた個体は、体長 22 mm とやや小型で、体形においても徳之島亜種のものに似ていたが、雄交尾器側片先端部の形状は細長く、奄美大島基亜種の特徴と一致するものであった。また、触角の長さや上翅斑紋の状態においては、本個体と奄

美大島基亜種や徳之島亜種とはっきりと区別することはできなかった。今回は、調査することができた個体が雄1個体と少なく、亜種についての判断を持つことができなかったが、今後、各島の個体を十分にそろえた上で比較検討をおこないたい。

最後に、貴重は標本を採集され、ご恵与くださった東京都の青木淳一博士、並びに文献面でお世話になった久留米市の今坂正一氏に厚くお礼申し上げます。

#### 引用文献

- 今坂正一・祝 輝男, 2007. 喜界島で2007年に採集した甲虫. SATSUMA (鹿児島昆虫同好会会報), 57 (137): 119–129.
- Kishii, T., 1996. Notes on Elateridae from Japan and its adjacent area (14). Bulletin of the Heian High School, Kyoto, (39): 1–40, pls. 1–8.
- Kishii, T., 1999. A catalogue of the family Elateridae (Coleoptera) of Japan. Bulletin of the Heian High School, Kyoto, (42): 1–144.

(鈴木 互 法政大学第二高等学校生物科)

## ヒラタコメツキモドキの採集記録とその分布

平野幸彦<sup>1)</sup>・青木淳一<sup>2)</sup>

1) 〒 250-0865 神奈川県小田原市蓮正寺 585-29

2) 〒 106-0031 東京都港区西麻布 3-8-12

Collecting records and distribution of *Cathartocryptus hiranoi* (Coleoptera, Erotylidae)

Yukihiko HIRANO and Jun-ichi AOKI

Summary: Collecting records and distribution of *Cathartocryptus hiranoi* are cleared with brief description of external feature. This species is newly recorded from the following areas: Miyake-jima, Fukue-jima, Yakushima, Tanega-shima, Tokara-nakano-shima, Amami-Oshima, Tokunoshima, Okinoerabu-jima, Yonaguni-jima, Taiwan, and the Philippines (Mindanao Is.).

ヒラタコメツキモドキは、図鑑類にも掲載されておらず、初めて見た人は何科に属するのか見当もつかないことが多い。本種は、筆者の一人、平野が神奈川県三浦富士で採集した17頭および八坂充氏が福岡県宝満山で採集した2頭に基ついて Sasaji (1989) によって *Xenoscelinus hiranoi* という学名で記載されたものである。過去の経緯を見ると *Xenoscelinus* 属はキスイムシ科 Cryptophagidae やコメツキモドキ科 Languriidae に入れられたことがあり、現在はオオキノコムシ科 Erotylidae に収まっているが、分類上の所属に関しては議論が多い。外見はコメツキモドキとは似ても似つかない姿をしており、むしろヒラタムシやネスイムシに近い印象を与える。その後、*Xenoscelinus* 属は *Cathartocryptus* 属のシノニムとされ、本種も後者の属に移されている。筆者らは関東地方以西の各地で本種を採集することができたので、その形態を簡単に紹介し、分布範囲を整理し、新たな採集記録を示しておくことにした。なお、本種の採集にはフォッキング（殺虫剤の噴霧）が大変有効である。

## ヒラタコメツキモドキ

*Cathartocryptus hiranoi* (Sasaji, 1989)

[形態的特徴] 本種の形態については原記載に極めて詳しく述べられているが、主な特徴を示す。体長2.0-2.8 mm。かなり扁平で光沢を帯び、黒褐色、たまに黄褐色の個体がある。複眼はかなり大きく突出する。触角は11節からなり、3節からなる明瞭な球桿部を持つ。前胸背は横長で、側縁は後方に少し狭くなる。上翅はほぼ平行で、後端は丸まる。跗節式は5-5-5。雌雄はかなり形態を異にする

ので、ここに雌雄の写真を示した。雄は雌に比べて頭幅も前胸背の幅も広く、前胸背は後方に向かってより強く狭まり（図1）、大あごもはるかに幅広く外方へ出っ張る（図2）。

[分布] 本州・三宅島（新記録）・八丈島・九州・福江島（新記録）・屋久島（新記録）・種子島（新記録）・トカラ列島中之島（新記録）・奄美大島（新記録）・徳之島（新記録）・沖永良部島（新記録）・沖縄島・石垣島・西表島・与那国島（新記録）；台湾（新記録）；フィリピン（新記録）。

[採集記録] 2 exs., 埼玉県川口市荒井宿 3/4-VIII-2010, 平野幸彦; 7exs., 神奈川県横須賀市砲台山, 31-V-1988, 露木繁雄; 1♂, 8♀♀, 箱根町塔の沢～阿弥陀寺, 31-X-2008, 青木淳一; 1♂, 茅ヶ崎市清水谷, 16-III-2001, 平野幸彦; 1♀, 二宮町, 8-X-2006, 平野幸彦; 1♀, 小田原市, 14-VIII-1988, 平野幸彦; 1♂, 南足柄市丸太の森, 26-V-1997, 平野幸彦; 1ex., 秦野市弘法山, 14-VIII-1989, 平野幸彦; 1♂, 静岡県西伊豆富貴野山, 3-VII-2010, 青木淳一; 1♂, 3♀♀, 伊豆諸島三宅島伊谷, 6-IV-2010, 青木淳一; 2♂♂, 1♀, 三重県志摩市磯部町五知, 24-VII-2010, 青木淳一; 1ex., 京都府乙訓郡大山崎町天王山, 20-V-2009, 田中勇; 1ex., 岡山県倉敷市向山, 31-XII-2005, 千田喜博; 2exs., 同上, 1-I-2006, 千田喜博; 4♀♀, 熊本県相良市深水, 14-IX-2008, 青木淳一; 1♀, 熊本県五木村, 14-IX-2008, 青木淳一; 1♂, 1♀, 熊本県人吉市, 13-IX-2008, 青木淳一; 1♀, 長崎県福江島, 21/22-IX-2008, 青木淳一; 4exs., 鹿児島県薩摩川内市, 1/2-VI-2001, 平野幸彦; 6♂♂, 屋久島空港～安房, 11-X-2008, 青木淳一; 6♀♀, 種子島西之表市, 15/17-VII-2011, 青木淳一; 1ex., トカラ列島中之島, 25-VII-1969, M. Sasaki; 1ex., 徳之島天城町, 19-VII-2006, 青木淳一; 2exs., 奄美大島

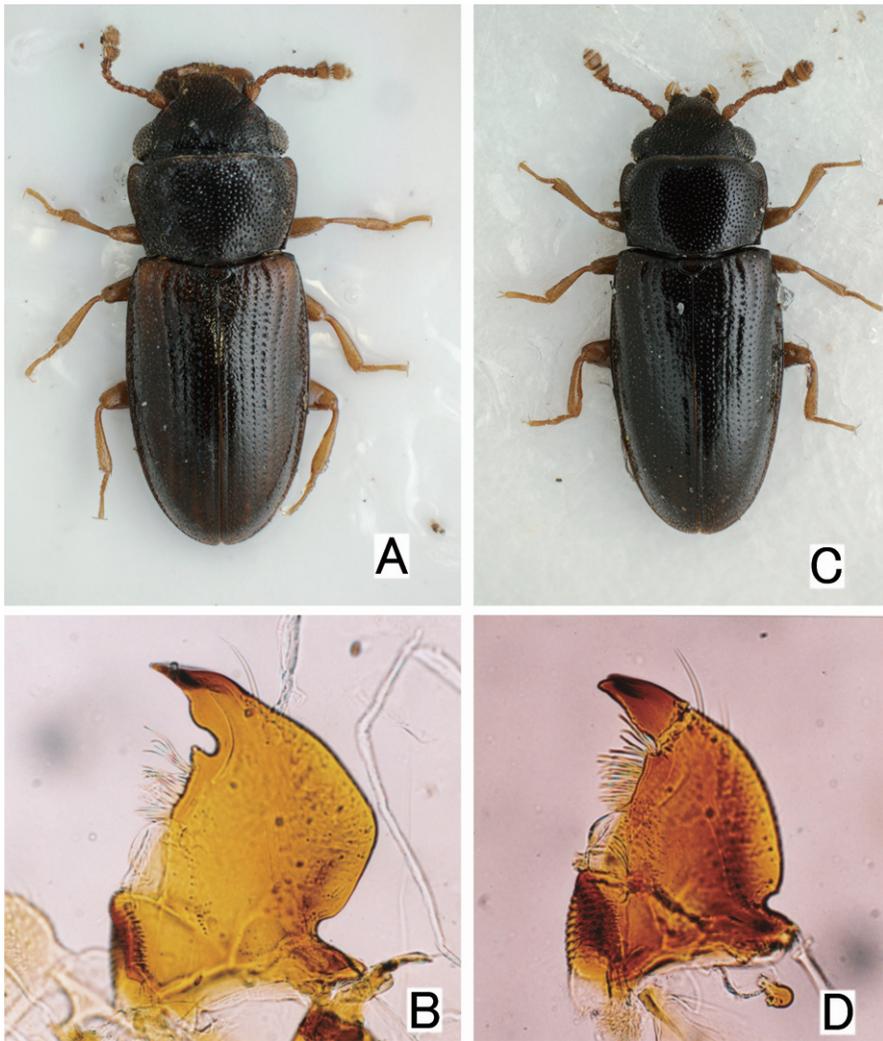


図1. ヒラタコメツキモドキ. A, B: 雄; C, D: 雌 (A, C: 全形図; B, D: 大あご).

フォレストポリス, 19-V-2003, 平野幸彦; 2♀♀, 沖縄永良部島大山植物園, 14-X-2010, 青木淳一; 1ex., 沖縄県大宜味村大保, 3-X-2002, 平野幸彦; 2♀♀, 沖縄県国頭村安田, 27-I-2009, 青木淳一; 1♂, 沖縄県国頭村与那~安田, 4/5-X-2010, 青木淳一; 3♀♀, 石垣島バナナ公園, 15-V-2008, 青木淳一; 1♂, 1♀, 石垣島於茂登山麓, 12-V-2008, 青木淳一; 2exs., 西表島相良川沿岸, 2-V-2003, 栗原隆; 1♂, 3♀♀, 与那国島高農道, 5-II-2010, 青木淳一; 1♂, Kenting-Park, Pingtung, Taiwan, 13-VIII-1971, 柴田泰利; 1ex., 台湾太麻里郷依麻, 5-VII-2006, 久松定智 (ライトトラップ); 3exs., 同所, 6-VII-2006, 久松定智 (ライトトラップ); 1ex., 台湾東部花蓮県紅葉温泉 (Naka Spa.), 27-XI-1962, 馬場金太郎; 12exs., フィリピン, ミンダナオ島 South Cotavato Prov., Maitum, Gasy, 13-VIII-1985, 酒井雅博. 雌雄判別のついたものを集計

すると, ♂18頭, ♀38頭となり, 雌のほうがはるかに多い.

本州では福島県, 埼玉県, 東京都, 神奈川県, 静岡県, 福井県, 京都府, 三重県, 岡山県, 九州では福岡県, 長崎県, 大分県, 熊本県, 鹿児島県から報告されている (平野, 1990, 1995; 今坂, 2001, 2012; 磯野・斎藤, 2007; 亀沢, 2011; 城戸・小田, 2006; 水野・荒田, 2005; 生川ほか, 2011; Sasaji, 1989; 佐々治, 1990; 佐々木, 2011; 釣巻, 2007; Wegrzynowicz, 2007; 山地, 2006) が, 四国からの記録はない. 愛媛大学の松尾進氏に確認したが, 報告はないようで, 愛媛大学にも四国産の標本は見当たらないとのことであった. 四国にも分布していると思われるが, 調査が不十分か, あるいは採集されていても本種と確認できず, 標本箱に眠っている可能性も考えられる. 南西諸島

には広く分布しているようで、海外では台湾、フィリピンまで見られ、広域分布種と言える。

## 謝辞

九州の記録を教えていただいた今坂正一氏、佐々木茂美氏、三宅武氏、愛媛大学のコレクションや個人データを提供していただいた愛媛大学の松尾進氏に厚く御礼申し上げる。また、台湾の地名についてご教示を頂いた上野俊一博士に感謝申し上げます。

## 引用文献

- 平野幸彦, 1990. ヒラタコメツキモドキ八丈島に産す. 月刊むし, (233): 41.  
 平野幸彦, 1995. ヒラタコメツキモドキの分布など. 月刊むし, (298): 24-25.  
 今坂正一, 2001. 久留米市高良山とその周辺の甲虫 1—未記録と興味深い種. KORASANA, (79): 31-48.  
 今坂正一, 2012. 島原半島産甲虫覚え書き 3—2011 年までの訂正と追加—こがねむし, (77): 59-68.  
 磯野昌弘・斎藤直彦, 2007. 福島県におけるヒラタコメツキモドキの記録. 甲虫ニュース, (159): 6.

- 亀沢 洋, 2011. 埼玉県東部におけるヒラタコメツキモドキほかの記録. 寄せ蛾記, (142): 40-41.  
 城戸克弥・小田正明, 2006. 鹿児島県稲尾岳山麓で採集した甲虫類 I. KORASANA, (73): 37-53.  
 水野弘造・荒田弥五郎, 2005. こめつきもどき科. 荒田家(京都府舞鶴市高野台)の邸宅内で採集された甲虫類の目録. Pp. 56-57. 日本甲虫学会.  
 生川展行・中山 惇・岡由佳里・横関秀行・稲垣政志・官能健次, 2011. 志摩半島の甲虫. 志摩半島の昆虫. Pp. 66-195.  
 Sasaji, H., 1989. Discovery of the curious beetle genus *Xenoscelinus* Grouvelle (Languriidae-Cryptophilinae) from Japan. Kanagawa Chūhō, (90): 223-228.  
 佐々治寛之, 1990. ヒラタコメツキモドキ発見のいきさつ. 月刊むし, (235): 53.  
 佐々木茂美, 2011. 大分県西部地方の甲虫 (2010). 二豊のむし, (49): 9-32.  
 釣巻岳人, 2007. ヒラタコメツキモドキを東京都板橋区で採集. 甲虫ニュース, (159): 6.  
 Wegrzynowicz, P., 2007. Erotylidae. Catalogue of Palaearctic Coleoptera 4. (Edited Löbl, L. & A. Smetana). Pp. 531-546. Apollo Books, Stenstrup.  
 山地 治, 2006. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (141): 19-20.

(2012 年 4 月 10 日受領, 2012 年 5 月 24 日受理)

## 【短報】日本産陸生ガムシ類の学名変更について

日本産陸生ガムシ (= ハバビロガムシ亜科) に、セマルマグソガムシ *Megasternum gibbulum* Motschulsky, 1866 (図 1) という種がいる。佐藤 (1985) による日本産ハバビロガムシ亜科の属への検索表がよくできているうえに、日本産本属は 1 種であることから、各地の甲虫目録で目にすることも少なくない種である。本種は、学名が記す通り、Motschulsky (1866) によって命名された種である。その後、Shatrovskiy (1989) が、ロンドンのルイスコレクションを用いて、日本産本属の別新種 *Megasternum japonicum* を記載した。この Shatrovskiy (1989) が記載した *M. japonicum* のパラタイプが北海道大学に保管されており、筆者は、それを調べた結果、*M. gibbulum* と同種であると判断した。そして、故佐藤博士と共著で、*M. japonicum* は、*M. gibbulum* のシノニムであるとした (Hoshina & Satō, 2005)。その後、*M. gibbulum* は、韓国からも発見された (Hoshina & Cho, 2008)。



図1. セマルマグソガムシ (兵庫県産標本)。

しかし、最近、

Fikáček *et al.* (2012) によって、セマルマグソガムシの学名変更がなされた。これによると、1) Motschulsky (1866) によって、*M. gibbulum* として記載された種は、日本や極東ロシア、中国などに分布するマグソガムシ *Pachysternum haemorrhoum* Motschulsky, 1866 と同物異名 (= シノニム) であり、*Megasternum* 属ではないこと、2) 一方、*M. japonicum* はまぎれもなく *Megasternum* 属に含まれること、3) それにともない、*M. japonicum* という学名が復活すること、となった。つまり、日本に生息する *Megasternum* 属が 1 種のみという Hoshina & Satō (2005) の判断は間違いではないが、和名セマルマグソガムシとされていた種に対応する学名は、*Megasternum japonicum* Shatrovskiy, 1989 となる。なお、佐藤 (1985) に掲載されているセマルマグソガムシの写真と形態の説明文は、日本に生息している種に合っている。したがって、1985 年当時は未記載種であったセマルマグソガムシが、対応学名が誤った状態で図鑑に載っていた、と理解していただきたい。繰り返しになるが、上記のことを要約すると、「日本には、*Megasternum* 属は、*Megasternum japonicum* Shatrovskiy, 1989 の 1 種のみが生息する」ということだ。種の中身が特に変わったわけではないので、*M. japonicum* に対応する和名は従来の「セマルマグソガムシ」を使用したい。

なお、蛇足ではあるが、Fikáček *et al.* (2012) は、

国後島産の *M. japonicum* の標本を調べており、「*M. japonicum* は、日本と露国の両方に生息する種」としている（注、Fikáček *et al.* (2012) は、Hoshina & Cho (2008) を引用していない）。日本人としては、当然ながら、この見解に従うことはできない。よって、筆者は、今後も、*M. japonicum* は、「日本と韓国にのみ生息する種である」と扱っておく。

#### 引用文献

- Fikáček, M., F. Jia & A. Prokin, 2012. A review of the Asian species of the genus *Pachysternum* (Coleoptera: Hydrophilidae: Sphaeridiinae). *Zootaxa*, 3219: 1–53.
- Hoshina, H. & Y. B. Cho, 2008. Notes on the subfamily Sphaeridiinae (Coleoptera: Hydrophilidae) from Korea, I. The *Entomological Review of Japan*, 63: 125–127.
- Hoshina, H. & M. Satō, 2005. Synonymic notes on two species of the families Hydrophilidae and Leiodidae (Coleoptera) from Japan. *The Entomological Review of Japan*, 60: 13–16.
- Motschulsky, V., 1866. Catalogue des Insectes reçus du Japon. *Bulletin de la Société impériale des Naturalistes de Moscou*, 39: 163–200.
- 佐藤正孝, 1985. ガムシ科. p. 209–216. 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編著. 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社. 514 pp.
- Shatrovskiy, A. G., 1989. Hydraenidae, Hydrophilidae. p. 260–293. Ler, P. A. (ed.). *Operedelitel' nasekomykh Dal'nego Vostoka SSSR v shesti tomakh. Vol. 3. Zhestkokrylye, ili zhuki (part I)*. 572 pp. Nauka, Leningrad (in Russian).

(保科英人 910–8507 福井市文京 3–9–1  
福井大学教育地域科学部)

#### 【短報】感潮域からホンシュウセスジダルマガムシを採集

セスジダルマガムシ属の海岸部に生息する種は、日本からは従来、塩分濃度 0～1.8% のタイドプールに生息するシオダマリセスジダルマガムシのみが知られていた（吉富ほか, 2000）。また、海岸部の岸壁を伝う淡水中に生息する種としてニッポ

ンセスジダルマガムシが知られており（吉富ほか, 2000）、平地から山地の溪流に生息するとされていたセスジダルマガムシもニッポンセスジダルマガムシと同様の環境からも記録されている（菅谷, 2009）。今回、塩分の混じる水域に生息する種としてシオダマリセスジダルマガムシに続いて 2 種目となるホンシュウセスジダルマガムシ *Ochthebius japonicus* Jäch を河口の感潮域から採集したので報告する。本種は今まで平地から低山地の溪流や小川、大河川の中流域などに生息するとされていた（吉富ほか, 2000）。

ホンシュウセスジダルマガムシ *Ochthebius japonicus* Jäch (図1, 2)

85exs., 三重県尾鷲市三木里町八十川, 30. VIII. 2011, 稲畑採集・稲畑・吉富保管。

採集地は、三重県尾鷲市三木里町を流れる八十川（やそがわ）である。源流部の標高は約 600～690 m ほどあるがわずか 4 km 程度で河口に達する小川である。採集は 15 時 30 分ころから約 1 時間おこない、満潮時にほぼ完全に水没する環境を選んだ（図 3, 4）。ほとんどの個体は水面から突き出た礫の水際付近のくぼみに潜んでいるのを採集した。河床の礫はごつごつして大きく、付着藻類はほとんど繁殖しておらず水も澄んでいたため、上流域のような感じを受けた。本来上流域で採集されることの多い本種が、河口で採集されたのはこの河川長の短さが関係しているかもしれない。塩分濃度は計測していないが、満潮直後に舐めてみたところ、感潮域の上流端ではほとんど無味で、河口に近づくほど塩味を強く感じたので塩分濃度に大きな差があったと考えられる。採集個体の大部分は塩味をほとんど感じない場所で採集したが、少数は塩味を若干感じる部分でも得られた。同属のハセガワダルマガムシでは、増水により一週間ほど水没していたと推定された事例が報告されている（中島ほか, 2004）。今回の例も干満の度に海水の影響を受けない上流に避難しているとは考えにくい。満潮時は水没しているものと思われる。採集時は天気がよく暖かかったので、本種が飛ぶかどうか手のひらに乗せて実験したところ、すぐに翅を広げて飛ぶものの数センチ飛んで手のひらの上に落下する有様であった。それ以上確かめなかったが飛ぶのがあまり上手ではないのかもしれない。通常の色彩の個体に混じって背面が黒っぽい個体を 5 頭採集したが、吉富 (2012, 私信) によるとホンシュウセスジダルマガムシの擦れた個体であろうとのことである。



図1–2. ホンシュウセスジダルマガムシ. 1: 通常の個体; 2: 黒っぽい個体.



図3. 干潮時, 30日16時34分撮影, この日の干潮時刻11時44分.



図4. 満潮時, 31日6時54分撮影, この日の満潮時刻6時02分.

最後に, 文献と本種の同定についてご教示いただき, 発表を勧めていただいた愛媛大学の吉富博之博士にお礼申し上げる.

#### 引用文献

- 吉富博之・松井英司・佐藤光一・疋田直之, 2000. 日本産セスジダルマガムシ属概説, 甲虫ニュース, (130): 5-11.  
 中島 淳・緒方 健, 2004. 福岡県・佐賀県におけるセスジダルマガムシ属4種の採集記録, 甲虫ニュース, (147): 13-14.  
 菅谷和希, 2009. セスジダルマガムシ属2種を千葉県海岸部より採集, 月刊むし, (465): 46.

(稲畑憲昭 600-8238 京都市下京区東堀川通木津屋橋下る御方紺屋町 3-206)

#### 【短報】愛媛県面河溪から新種として記載された *Anostirus* 属のコメツキムシ

日本から知られている *Anostirus* 属の種は, ダイミョウコメツキ (*A. daimio*) とツマガヒロヒラタコメツキ (*A. castaneus japonicus*) の2種であるが, 最近, イタリアの Dr. G. Platia が, 愛媛県面河溪から

*A. omogoensis* と命名した新種を記載した. 体長は11 mm で体幅は3 mm, 体は上翅も含めて黒色で, 上翅の翅底部の第3, 4間室あたりと上翅側縁部の一部などに判然としない黄橙色斑を有し, 肢は黒褐色である. 触

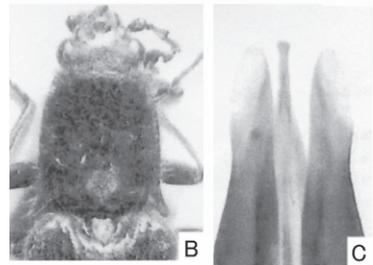


図1. 原記載で示された図の一部: A, 右触角の基部3節; B, 頭部と前胸背板; C, ♂交尾器の末端部(背面).

角は破損しており, 左触角は基部節のみ, 右触角は基部3節のみが残っている個体である(図1A). タイプ標本は1♂, Omogo Valley, Kumakogen town, 8. V. 2005, T. Kurihara & T. Koseki としている. この個体を採集された栗原隆博士によれば, 面河山岳博物館付近のカエデの花上から見出し, チェコの知人にカミキリとの交換用に送った個体で, それが Dr. Platia に渡り, 新種として記載されたようだとのことである. この新種の形態の一部は図示されているが, この属では♂は通常第3節から櫛歯状をしているが, 図1Aでは棍棒状(原記載では triangular)に近い形態をしており, 奇形のように思われる. いずれにしても, 日本からこの属の新種が記載されたことは思いもよらないことである. 原記載とその不鮮明な付図だけでは正確なことは判明しないので, 今後, 同好者の支援を得て, この新種の実体の解明をして行きたいと思う.

末尾に, 本種の採集経緯について御教示をいただいた栃木県立博物館の栗原隆博士, 文献の入手について支援をいただいた大阪市の有本久之氏に心から御礼を申しあげる.

#### 引用文献

- Platia, G., 2011. Description of three new species of click beetles from the Palearctic Region, with new distributional records (Coleoptera, Elateridae). Bol. Soc. Ent. Aragonesa (S. E. A), 49(31/ 12/ 2011): 19-22.

(大平仁夫 444-3511 岡崎市舞木町狐山 6-4)

### 【短報】埼玉県におけるマルドロムシ科の追加記録

マルドロムシ科 Georissidae は、日本国内から 1 属 7 種が記録されている (Hansen, 1999). Hansen (1991) は、本科の生息環境として水辺の湿った砂の中を挙げており、佐藤 (1981) によれば、国内でも主に河川の似たような環境で得られているようである。

筆者らは、埼玉県初記録となるヤマトマルドロムシと同属 2 例目の記録となるシウムネマルドロムシの標本を有するため、記録を公表して採集時の状況にも言及したい。なお、同定は Satô (1972)、佐藤 (1981)、中根 (1995) を参考にして、最終的な同定確認を吉富博之博士にお願いした。

ご多忙のところ、標本の同定確認を頂くと共に本稿にも目を通して頂いた吉富博之博士 (愛媛大学環境昆虫学研究室)、茨城県におけるマルドロムシ科記録に関して教示頂くと共に、貴重な文献を恵与頂いた大桃定洋博士 (茨城県阿見町)、埼玉県における同科記録に関して教示頂いた新井浩二氏 (埼玉県嵐山町)、文献とご助言を頂いた蓑島悠介氏 (北海道大学大学院昆虫体系学研究室) に御礼申し上げる。

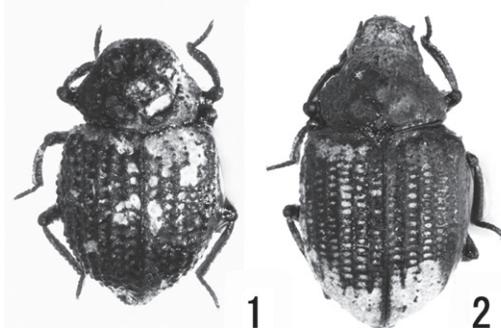


図1. ヤマトマルドロムシ (荒川河川敷産)。

図2. シウムネマルドロムシ (赤平川河川敷産)。



図3. ヤマトマルドロムシ採集地環境 (落葉後は日当たりが良い) (2012年2月撮影)。



図4. 下草除去後の同種採集地土壌 (2012年2月撮影)。

ヤマトマルドロムシ *Georissus japonicus* M. Satô, 1972 (埼玉県初記録種, 図1)

1ex., 埼玉県秩父市下影森 (荒川河川敷) (標高 190 m), 1-2. V. 2010 (さなぎ粉を誘引剤としたピットホールトラップ), 岩田朋文採集保管。

ヤマトマルドロムシは、新潟県村上市の小さな池の底に堆積した落ち葉中から採集された個体を基に記載された種である (Satô, 1972; 佐藤, 1981). 埼玉県の近県では、新潟県、茨城県 (ただし、報文内に「同定には多少の疑問あり」との記述がある) (高野・大桃, 2008), 静岡県 (多比良, 2005; 北野, 2011) から記録されている。茨城県の産地は、同一地点で多くの個体が採集されており (高野・大桃, 2008), 本種の生息地として貴重であったようだが、東日本大震災の津波により大きな影響を受けたようである (大桃博士, 私信). ちなみに静岡県では、本種は県のレッドリストにて情報不足 (DD) に選定されている (静岡県, 2004).

今回報告した埼玉県産の個体は、荒川中流域の河川敷に仕掛けたピットホールトラップで得られた。誘引剤としてサナギ粉を用いたが、これに本種が誘引されたわけではないだろう。採集地点は河畔林内で下草が茂り、日当たりが悪く、地表は湿っていた (図3)。また下草を除去して、付近一帯の土壌が砂地であることを確認している (図4)。最寄りの水辺からは、河川敷にある池から約 10 m, 河川から約 50 m の距離があり、水辺の間近より得られたわけではない。これらの状況は、多比良・石川 (2011) にあるババマルドロムシ *G. babai* M. Satô, 1970 の採集状況や環境とよく似ている。

シウムネマルドロムシ *Georissus kurosawai* Nakane, 1966 (図2)

3exs., 埼玉県秩父郡小鹿野町黒海土 (赤平川河



図5. シワムネマルドロムシ採集地環境 (2012年2月撮影)。



図6. 同種採集地土壌 (2012年2月撮影)。

川敷) (標高 260 m), 24. IX. 2007, 岩田朋文採集保管。  
シワムネマルドロムシは、愛知県名古屋産の標本を holotype として、福島県会津若松、北海道帯広の標本を加えて記載された種類である (Nakane, 1966)。本科の中では分布域が広い種類のように (佐藤, 1981), 各地で記録が見られる。埼玉県の近県では、東京都 (Satô, 1972), 神奈川県 (平野, 2004), 栃木県 (栃木県, 2003), 静岡県 (多比良, 2005) など記録されており, 前種同様に静岡県ではレッドリストにて情報不足 (DD) に選定されている (静岡県, 2004)。埼玉県では新井 (2006) により, ライトトラップへ飛来した複数個体の記録が公表されていたが, 生息環境については知見が乏しかった。

今回報告した個体は, 雨天時に赤平川河川敷の砂地にて石起こしをおこなった際に得られた。採集地点は河川から約 2 m に位置し, 砂地を枯れ草や流木が所々覆っている (図 5, 6)。同地には度々採集へ赴いており, 同様の採集を実施しているが, 追加個体は得られず, 見つけ採りによる本種の採集は難しいと思われる。

## 引用文献

- 新井浩二, 2006. 埼玉県から新たに記録される甲虫類 (10). 寄せ蛾記, (121): 1-10.
- Hansen, M., 1991. The hydrophiloid beetles. Phylogeny, classification and a revision of the genera (Coleoptera, Hydrophiloidea). Biologiske Skrifter, Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab, 40: 1-368.
- Hansen, M., 1999. Georissidae. Hydrophiloidea (s. str.) (Coleoptera). In Hansen, M. (ed.), World Catalogue of Insects, 2: 44-51. Apollo Books, Stenstrup, Denmark.
- 平野幸彦, 2004. コウチュウ目, pp. 335-835. 神奈川県昆虫誌 II, 神奈川県昆虫談話会.
- 北野 忠, 2011. かつては水生昆虫の楽園 遠州浜の後背湿地. 水生昆虫大百科 2011 年度特別展「およげ! ゲンゴロウくん~水辺に生きる虫たち~」展示解説書, pp. 90-92. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- Nakane, T., 1966 (1965-1966). New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXIII. Fragmenta coleopterologica, (part 14): 55-58; (part 15): 59.
- 中根猛彦, 1995. 日本の雑甲虫覚え書 13. 北九州の昆虫, 42 (1): 41-46, pl. 6.
- 高野 勉・大桃定洋, 2008. 茨城県産甲虫リスト補遺 (2). るりぼし, (36): 18-37.
- 栃木県, 2003. 栃木県自然環境基礎調査 とちぎの昆虫 II, 557pp. 栃木県林務部自然環境課.
- Satô, M., 1972. The georissid beetles of Japan. The Journal of Nagoya Women's College, (18): 207-213.
- 佐藤正孝, 1981. 日本産マルドロムシ科概説. 甲虫ニュース, (53): 1-4.
- 静岡県県民部環境局自然保護室, 2004. レッドリスト昆虫類. 2012年2月26日参照. [https://www2.pref.shizuoka.jp/all/file\\_download103500.nsf/07F9B3A818B59B6A492573A100374F5F/\\$FILE/13\\_redlist\(insecta\\_rev\).pdf](https://www2.pref.shizuoka.jp/all/file_download103500.nsf/07F9B3A818B59B6A492573A100374F5F/$FILE/13_redlist(insecta_rev).pdf).
- 多比良嘉晃, 2005. コウチュウ目. 静岡県野生生物目録, pp. 107-163. 静岡県環境森林部自然保護室.
- 多比良嘉晃・石川 均, 2011. 天竜川河川敷におけるババマルドロムシの確認記録. さやばねニューシリーズ, (3): 23-25.
- (岩田朋文 790-0852 松山市石手3-2-58キャッスル石手501号 jupiter33\_it@yahoo.co.jp)
- (岩田泰幸 940-1104 長岡市撰田屋町2633-3 ニューロンサニター (株) laccotrephes\_1874@yahoo.co.jp)

# 房総半島におけるヒラズイソアリヅカムシの記録とその生息環境について

亀澤 洋

〒 350-0825 川越市月吉町 32-17

Records of *Physoplectus reikoeae* (Staphylinidae, Pselaphinae) from Bôshô Peninsula, Chiba Prefecture, central Honshu, Japan, with consideration of its microhabitats

Hiromu KAMEZAWA

ヒラズイソアリヅカムシ *Physoplectus reikoeae* (Sawada, 1992) は、神奈川県真鶴岬産の 1♂1♀ をもとに新属新種として記載された海岸性のアリヅカムシである。原記載では本種をタイプ種として *Thalassomerus* 属が創設され、奄美大島から同時に記載された同属別種とともに日本のファウナに加えられた。しかし、その後、Chandler (2001) によって *Thalassomerus* 属は Jeannel (1953) がモーリシャスから記載した *Halorabyxis* 属とともに Reitter (1881, 1885) が創設した *Physoplectus* 属の下位シノニムにされている。その結果、海岸性昆虫としては非常に異例ではないものの (Cheng, 1976)、本属はニューギニア、オーストラリア (クイーンズランド州トレス海峡諸島レンネル島)、フランス領ポリネシア (ソサエティ諸島)、モーリシャス、ソマリア、そして日本から知られるという特異な分布様式をもつ。ほかにも東洋区、オセアニア区の島々から複数種が確認されているという (Chandler, 2001)。日本からは、本州に分布する本種および、奄美大島、沖縄島、石垣島、与那国島に分布するアマミイソアリヅカムシ *Physoplectus miyakei* (Sawada, 1992) の 2 既知種と、さらに琉球から 2 未記載種の存在が知られている (新井ら, 2005)。

本種はタイプ産地のほか、静岡県伊豆半島南部 (多比良ら, 2000)、神奈川県三浦半島城ヶ島 (浅野ら, 2012)、日本海側の島根県島根半島西部 (河上ら, 2007) の本州海岸部から点々と生息情報がある。しかし、一般には採集されにくく、その分布の全体像が詳らかになっていないと言いがたい。その一方で、現代では自然海岸の減少等により、本種のような海岸性種の生息は圧迫されている状況下にあると予想される。本種が最初に発見

された神奈川県で県版のレッドデータブック (平野, 2006) に絶滅危惧種としての掲載があるのも、こうした現況をふまえてのことだろう。

筆者は、これまで生息が確認されていた最東記録にあたる三浦半島より東の千葉県房総半島で本種を得ているので採集状況を報告するとともに、その生息環境についても言及してみたい。採集データは以下のとおりである。

2♂♂, 2♀♀, 千葉県南房総市千倉町大川, 4. V. 2012; 3♂♂, 5♀♀, 千葉県南房総市白浜町根本, 5. V. 2012, 筆者保管。

採集地点は岩礁周辺の潮間帯から潮間帯上部にかけての砂礫地で、付近に大河川の流入はみられない。採集地点に近接してはいないものの、小規模の淡水のしみ出し、海への流入がいずれの磯浜でもみられた。大潮の干潮時に、岩場に隣接した砂地に埋まった大きな石を掘り起こして、地表から 15–25 cm 程度の深さの石の裏面についた個体を採集した。本種が得られた石の裏には一面に粘土が付着し、石の下の細粒からなる礫層にも粘土が薄く沈着していた。粘土は適度な湿り気を帯びて



図1. ヒラズイソアリヅカムシの分布 (★: タイプ産地, ●: 既記録地, ○: 新記録地)。



図2. ヒラズイソアリツカムシ生息環境 (A: 南房総市千倉町; B: 同, 白浜町)。



図3. A: ヒラズイソアリツカムシ♂ (房総半島産; ♂は中脛節の末端内側に鉤状突起をそなえる) ; B: ♀ (同) ; C: 砂浜の石を起したところ。石の下だった窪みの底の灰色の濃い部分に粘土が沈着している ; D: 石下の、一様に粘土がまわった細粒からなる礫層 (Cの画面中央部を接写したもので、粘土は灰色) ; E: 石の裏に付着した粘土の状態 (Cとは別の地点で、粘土は黄土色) 。※C-Eの微環境から本種が確認された。スケールはともに0.5 mm。標本写真は、小野広樹氏撮影。

いたが、べったりと濡れた状態ではなかった。単独で見つかったのは1例のみで、最大で4個体が同一の石の裏面から発見された。もっとも海から近いところでは、いちばん潮が引いた干潮時に近い時間帯で汀線から3 mほどの距離しかなく、本種の確認地点から1.5 mほどの石下からはミミズハゼの一種も確認された。ただし、本種が得られた場所の80%は、満潮時に限ってわずかに冠水する程度と見なされる地点だった。このことは、新井ら(2005)が真鶴岬においては満潮時には完全に水没するような地点で得られたとする報告とは若干異なるが、潮間帯の上限付近に生息するという、河上ら(2007)の日本海側における観察とは符合している。筆者の視点では、今回、本種が確認された房総半島におけるマクロな環境は、砂地に石が点在する程度で、砂泥地に転石が非常に多い真鶴岬とはやや異なっているようにも思えた。

また、既記録地の静岡県伊豆半島の最南部でも本種を得たことがあるので合わせて確認状況を示す。

4♂♂, 1♀, 静岡県下田市田牛盥岬, 17. X. 2004, 新井志保管。

多比良ら(2000)の報告によると、同地での本種の生息環境は海岸部の飛沫帯であるが、筆者が採集したのは海からはやや離れた地点だった。汀線より20 m以上は内陸に位置し、岩の崖を伝う淡水の流れが小さな入り江の砂浜を通過して海に流れ込むような場所で、砂浜中で伏流水となっている周辺に埋まったこぶし大の石を起したところ本種が見つかった。石の下層(地下約10 cm)には細かな礫が堆積し、礫は薄く粘土をまとっており、その隙間をゆっくり徘徊している本種を採集した。この地点は、地表が海水に覆われることは通常ほぼあり得ない場所だった。

以上のように、本種のマイクロな生息環境には、異なった3地点の観察で、石と細かな礫、粘土の3点セットの組み合わせが存在していた。本種は、水が緩やかに流れたあとに粘土が堆積した地下の小さな隙間に特異的に生息し、同一環境に生息する何らかの小動物を捕食しているものと推察される。そのような微小な地下隙間を生み出す水の緩やかかつ間歇的な流れは、水流の障害となる岩盤に近接した場所で起こりやすいと思われる。また、その微環境が存在するのは、主に潮間帯から潮間帯の直上部あたりまでではないかと考えられる。さらには、伊豆半島南部での一観察例によれば、

条件によっては必ずしも潮間帯付近である必要はないようだ。ただし、水の恒常的または断続的な流れから離れすぎた場所では、石の下に細かな礫と粘土の堆積が普通にみられるものの、やや乾燥しており、本種は見いだせなかった。

浅野ら(2012)によれば、漂着後時間の経過した海藻下で夏季に得られており、また周年経過も不明である。あるいは、成虫の分散期には頻繁に地表を徘徊しているのかもしれない。

本属には雌雄ともに後翅が発達して灯火に誘引される種もあるが(Sawada, 1992; 野村, 2010)、本種の場合、筆者が南房総で採集した個体では雌雄ともに後翅は短翅だった。また、本種は同属他種と比較すると、複眼も退化傾向が顕著である。このような後翅と複眼の発達程度の連動は、例えば、同じハネカクシ科で潮間帯に生息するナギサハネカクシ属 *Bryothinusa* の有翅種と無翅種(Sawada, 1971)、ムクゲキノコムシ科の同一種内の多型現象(Hall, 2005)に限らず、昆虫に広くみられる一般的な傾向である。さらに、本種は本属の中でも体形が細く、より扁平であるなど、地下の微小な隙間で生活することに適応した結果と見なしうな特徴がある。

近年、静岡県大井川の伏流水からハイバラムカシゲンゴロウ *Phreatodytes haibaraensis* M. Kato, 2010 が発見され、改めてマイクロハビタットとしての地下水生態系が注目された(加藤, 2010)。ヒラズイソアリヅカムシは水生種ではないが、間隙水の干満が生み出す微小な地下隙間に生息するという意味では、海浜の地下水に関わる地下性種であり、地下水生態系と陸上生態系をつなぐ一員といえよう。

末筆ながら、本稿を草するにあたり、種々のご示唆をくださった野村周平博士(国立科学博物館)と丸山宗利博士(九州大学総合研究博物館)、問い合わせに応じてくださった林成多博士(ホシザキグリーン財団)と新井志保氏(嵐山町)、標本を撮影してくださった小野広樹氏(八千代市)に心よりお礼申し上げる。

#### 引用文献

- 浅野 真・川島逸郎・小野広樹, 2011. 三浦半島の海浜における昆虫類の記録. 第1報. 神奈川自然誌資料, (33): 65-74.
- 新井志保・野村周平, 2005. 日本産 *Physoplectus* 属(ハネカクシ科, アリヅカムシ亜科)の分類及び生息環境について. 日本鞘翅学会第18回大会講演要旨集, p.13.
- Chandler, D.S., 2001. Biology, morphology, and systematics of the ant-like litter beetle genera of Australia (Coleoptera:

- Staphylinidae: Pselaphinae). *Memoirs on Entomology, International*, Vol. 15, viii + 560 pp.
- Cheng, L. (Ed.), 1976. *Marine insects*. North-Holland Publishing Company, Amsterdam, 581 pp.
- Hall, W. E., 2005. 11.2 Ptiliidae. Pp. 251–261, in: Beutel, R. G. & R. A. B. Leschen eds., *Handbook of Zoology, Volume IV, Arthropoda: Insecta, Part 38, Coleoptera, Beetles, Vol. 1, Morphology and Systematics (Archostemata, Adephaga, Myxophaga, Polyphaga partim)*. De Gruyter, Berlin / New York.
- 平野幸彦, 2006. 甲虫類. Pp. 343–367, 高桑正敏・勝山輝男・木場英久編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- Jeannel, R., 1953. Les Pselaphides de Madagascar. *Mémoires de l'Institut Scientifique de Madagascar Série E: Entomologie*, 4: 151–344.
- 加藤 真, 2010. 生命は細部に宿りたもう ミクロハビタットの小宇宙. 134+x pp., 岩波書店.
- Kato, M., A. Kawakita, and T. Kato, 2010. Colonization to aquifers and adaptations to subterranean interstitial life by a water beetle clade (Noteridae) with description of a new *Phreatodytes* species. *Zoological Science*, 27: 717–722.
- 河上康子・林 成多, 2007. 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究 (2) 島根半島. ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 37–76.
- 野村周平, 2010. 石垣島で中瀬式ライトトラップ (NLT) によって採集されたアリヅカムシ. 甲虫ニュース, (172): 1–6.
- Reitter, E., 1881. Versuch einer systematischen Eintheilung der Clavigeriden und Pselaphiden. *Verhandlungen des Naturforschenden Vereines in Brünn*, 20: 177–211.
- Reitter, E., 1885. Abbildungen und Bemerkungen zu wenig gekannten Pselaphiden-Gattungen mit Beschreibungen neuer Arten. *Deutsche Entomologische Zeitschrift*, 29: 333–339.
- Sawada, K., 1971. Aleocharinae (Staphylinidae, Coleoptera) from the intertidal zone of Japan. *Publications of the Seto Marine Biological Laboratory*, (19): 81–110.
- Sawada, K., 1992. New genus and species of intertidal Brachyglutini (Coleoptera, Pselaphidae) from Japan. *Raffles Bulletin of Zoology*, 40(1): 55–60.
- 多比良嘉晃・松本雅道, 2000. 静岡県における海岸性甲虫相. 環境システム研究, (7): 39–71.

(2012年4月18日受領, 2012年5月21日受理)

#### 【短報】ヒラタカクヒメエンマムシの一採集例

ヒラタカクヒメエンマムシ *Margarinotus (Kurilister) kurbatovi* (Tishechkin, 1992) は国後島をタイプ産地とし, ほかに北海道, 本州, 四国から分布が知られる採集例の少ないエンマムシである (Ôhara, 1993).

生態情報も少なく, Tishechkin (1992) は, 正模式標本の雄個体が得られた状況について, 朽ち木を篩うか, 枯れ木の樹皮下から得られたとしながらも, 採集者の S. Kurbatov 氏はそれ以上のことを記憶していないと但し書きを添えている。また,

平野 (1994) はブナの朽ち木に生えたキノコ (または樹皮下) から採集したことを報じ, 大原ら (2011) は, 北海道でトランクウィンドウトラップを実施して本種を複数採集するとともに, 鳥類や哺乳類などの巣に依存する種ではないかと推定している。

筆者は東京都奥多摩町において本種をやや特殊な状況下で採集しているので報告する。

2exs., 東京都西多摩郡奥多摩町日原一石山～人形山 (標高 1,000–1,100 m), 4. V. 2007.

周辺環境はブナ, ミズナラを主体とした森林で, 2 個体ともクサアリの一種 *Lasius (Dendrolasius)*

sp. が営巣したミズナラ大径木の根元でアリの巣入り口付近から採集した。そのため, 同時に得られた職アリを別台紙に貼付け, 本種標本と同じ針に刺したかたちで筆者が保管している。東京都初記録にあたる。

過去の採集状況とはやや異なるが, 朽ち木または木の枯死部に関係している点は共通している。このアリの巣からは, 多くの好犠性ハネカクシが得られた以外に, セスジウムシ *Omoglymmius crassiusculus* (Lewis, 1888) といった, アリとの親和性は認めがたい朽ち木性の甲虫 (この場合, 変形菌食者といったほうがより正確) も確認しており, 本種を好犠性種とにわかに断定できるものではない。むしろ, 甲虫のなかでも硬い体表構造をもつエンマムシ科が, 一般論として, アリからの攻撃を被りにくいことの一観察例にすぎないかもしれない。

この巣にはその後も注目していたが, 追加個体は得られなかった。後日, このアリの巣から 20 m ほど離れた場所を飛翔中の個体を採集しているので, 合わせて記録しておく。

lex., 同地, 5. VI. 2007, 筆者保管。

末筆ながら, 本種の生態情報について種々ご教示をくださった大原昌宏博士 (北海道大学総合博物館) に深謝したい。

#### 引用文献

平野幸彦, 1994. ヒラタカクヒメエンマムシをブナより得る。



図1. ヒラタカクヒメエンマムシ (奥多摩町産)。

月刊むし, (276): 39.

Ôhara, M., 1993. Notes on the family Histeridae from eastern Hokkaido. *Memoirs of the National Science Museum*, (26): 1025-1150.

大原昌宏・上田明良・尾崎研一・佐山勝彦, 2011. トランク ウィンドウトラップで採集されたエンマムシ類. さやば ねニューシリーズ, (3): 8-12.

Tishechkin, A. K., 1992. Two new species of Histeridae (Coleoptera) from Palaearctic Asia. *Elytron*, Barcelona, (5[for 1991]): 325-329.

(亀澤 洋 350-0825 川越市月吉町 32-17)

#### 【短報】フトミツギリゾウムシの日本からの追加記録

フトミツギリゾウムシ *Prophthalmus wichmanni* Kleine, 1916 (ミツギリゾウムシ科) は, ♂の後頭部から口吻端までが太長く, 複眼が小さいという非常に特徴的な頭部形態を持つ種であり, インド(アッサム, ダージリン) およびラオス, ベトナム, マレーシア, 中国南部, 台湾, 日本(石垣島) に分布することが知られている (Morimoto & Kojima, 2005). 本種の詳しい生態は未だ不明である. Sforzi & Bartolozzi (2004) は, Kabakov (2001) に基づいて *Terminalia* sp. (シクンシ科) と *Ficus* sp. (クワ科), *Trema* sp. (ニレ科), *Citrus* sp. (ミカン科) を本種の寄主植物としてリストアップしているが, 原典に当たると, 単に成虫がこれらの樹種の枯木上で発見されたというだけの知見に過

ぎず, これを寄主記録とみなすのは無理があることが分かる.

フトミツギリゾウムシは, 日本では極めて稀な種であり, 今のところ Morimoto & Kojima (2005) が日本初記録として報じた石垣島米原からの1♀しか知られていない. 筆者らは, 石垣島産の2個体の標本を検査する機会に恵まれた. 大変貴重な採集例であると考えられるので, ここに報告する.

1♂ (図1), 沖縄県石垣島嵩田林道, 31. III. 1992, 栗原珪一採集 (農環研所蔵昆虫標本番号 24-0475214; 森本桂同定確認); 1♀ (図2), 沖縄県石垣島屋良部林道, 2. IV. 2003, 土岐和多瑠採集 (農環研所蔵昆虫標本番号 24-0475215).

嵩田林道で採集された1♂は小型個体で, 森本 (2008) によって図示された大型個体とは一見別種かと思ってしまうほど頭部形態が異なっているが, 森本博士に同定を確認していただいたところ, やはり本種であるとのことであった. なお, この個体の採集状況は不明である. 屋良部林道で採集された1♀は, 広葉樹の枯枝に巻きついた蔓性植物の花をスウィーピングした際に得られたものである. 先行記録の採集データと合わせて考えると, 石垣島においては, 少なくとも3月下旬から5月上旬にかけて本種の成虫が発生していることが分かる.

末筆ながら, 貴重な標本をご提供下さった栗原隆博士 (栃木県立博物館) と同定の労を賜った森本桂博士 (九州大学名誉教授) に厚くお礼申し上げます.

#### 引用文献

- Kabakov, O. N., 2001. Fauna and ecology of the Brentidae of Vietnam and adjacent territories of South China, Laos, and Thailand (Coleoptera, Curculionoidea). *Zoosyst. Rossica*, 9: 205-222.
- Kleine, R. 1916. Die Gattung *Prophthalmus* Lac. und ihr Verwandtschaftskreis. *Stett. ent. Ztg.*, 77: 217-286, Taf. 8-9.
- 森本 桂, 2008. ミツギリゾウムシ科研究入門 (1) — 概説と日本産の種 —. 月刊むし, (443): 4-16.
- Morimoto, K. & H. Kojima, 2005. Three additional species of Brentidae (Coleoptera, Curculionoidea) to the fauna of Japan. *Elytra*, Tokyo, 33: 126-133.
- Sforzi, A. & L. Bartolozzi (eds.), 2004. Brentidae of the World (Coleoptera, Curculionoidea). *Monogr. 39. Mus. Reg. Sci. nat.*, Torino. 974 pp.

(吉武 啓 305-8604 つくば市観音台 3-1-3  
(独) 農業環境技術研究所  
(土岐和多瑠 124-0001 葛飾区小菅 1-36-2-1003)



図1-2. フトミツギリゾウムシ, 石垣島産. 1: 小型雄; 2: 大型雌.

# 東京都多摩川で採集したケシマルムシ属の一種について

亀澤 洋<sup>1)</sup>・松原 豊<sup>2)</sup>

1) 〒 350-0825 川越市月吉町 32-17

2) 〒 245-0051 横浜市戸塚区名瀬町 765-2

**A faunistic note on a species of the genus *Sphaerius* Waltl, 1838 (Myxophaga, Sphaeriusidae) collected from Tamagawa river, Tokyo Metropolis, central Honshu, Japan**

Hiromu KAMEZAWA and Yutaka MATSUBARA

4 亜目からなる鞘翅目の 1 亜目ツブミズムシ亜目 Myxophaga は、体長 0.5 ~ 3 mm 程度の微小種ぞろい、構成種も世界で 4 科 12 属 100 種程度と、膨大な種数で構成される甲虫にあってはナガヒラタムシ亜目に次ぐ小さな分類群である。

日本におけるツブミズムシ亜目の既知種は、ツブミズムシ科 Torridincolidae のクロサワツブミズムシ *Satonius kurosawai* (M. Satô, 1982) 1 種のみである。また、酒井 (2001) の記録を嚆矢として、ケシマルムシ科 Sphaeriusidae 唯一の構成属 *Sphaerius* (種未決定種) が過去に数回記録されている。中根 (1983) および森本 (1986) によれば、ほかにデオミズムシ科 Hydroscaphidae が非公式に記録されている。

筆者らは、多摩川中流域の水生昆虫を調査する過程で、ケシマルムシ科の一種 *Sphaerius* sp. (体長約 1 mm) の生息を確認しているため報告する。今回、得られた個体の種までの同定はできなかったため、属の記録に留める。未記載種の可能性も排除できないと考えられるので、専門家による今後の研究に期待したい。

2exs., 東京都昭島市拜島町 (多摩川河川敷), 11. X. 2010, 松原採集; 18exs., 同地, 24. X. 2010, 松原・亀澤採集, 保管。

礫河原の水際から 30 cm 程度の陸域で、こぶし大の石の下面または裏面に静止している個体を確認した。表面の石を取り除き、砂利が混じった礫地に浅い穴を掘ると水が溜まるような状況下で、水たまり周辺の石の隙間に水を流す採集法が有効だった。このようにすると、水たまりの水面に浮いている個体を発見することができた。また、採集時、水面に浮かんだ個体の一部に上翅を広げる行動が観察された。*Sphaerius* sp. が見られたのは河原の一角だけで、個体密度も高くはなかった。

実体顕微鏡レベルでは、以下のような特徴によっ



図1. 多摩川における *Sphaerius* sp. の生息環境。



図2. 水たまり採集法の状況。

て、他科とは容易に区別される。1) 体長は 0.5 ~ 1.2 mm。黒色で、体は半球状、体表は滑らかである、2) 上翅は強く膨隆し、腹部を完全におおう、3) 触角は球桿をつくり、球桿部に長毛が疎生する、4) 後胸腹板がきわだって広く、後脚基節は幅広く、著しく発達した後脚基節板と連続する、5) 腹節は見かけのうえでは 3 節からなり、中央の節は幅が狭い、6) 後翅は発達し、翅脈は退化傾向にあるが、矩形室は目立ち、長い縁毛を有する。

走査型電子顕微鏡 (SEM) による観察も行ったので、特徴的と考えられる点を以下にいくつか列記する。

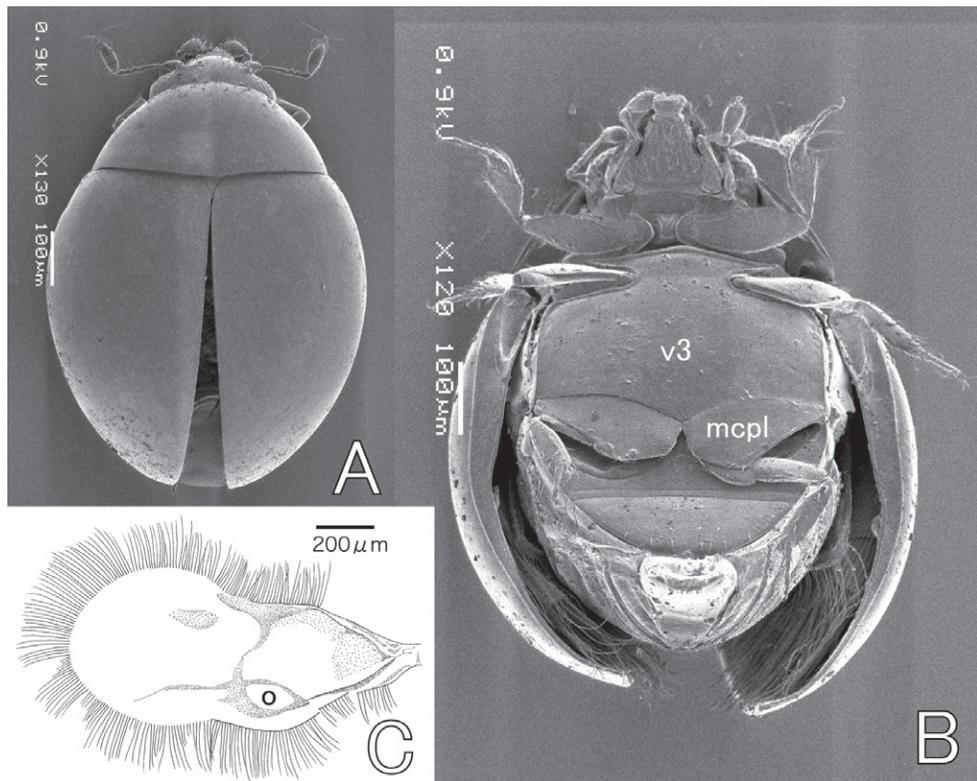


図3. 多摩川産*Sphaerius* sp.の全形と後翅 (A: 背面; B: 腹面; C: 左後翅, v3: 後胸腹板, mcpl: 後脚基節板, o: 矩形室) .

本属の触角は11節, その球桿部は3節からなるとされるが (Matthews, 1899; Hall, 2000; Beutel, 2005), 多摩川産の種では球桿部に4節を数えることができた (第8-11節). また, 触角の第1節はごく小さく, 第2節の背面に合着して瘤状突起のように見える点で, 典型的な本属とは触角の節構成がやや異なっているように見受けられた. 第2節の背面中央には3列の棘状突起がほぼ平行している構造が認められた. この構造が何のために存在しているのかについては不明だが, 触角の感覚毛に付着したゴミをしごいて取り除くなど, 物理的な機能にかかわるものと想像される. 第3節はほかの節に比べて極端に長く, 第4-7節はごく小さい.

また, 跗節は3節からなり, 各節や爪に長毛がまつわりつくため観察はしにくいものの, 基部の第1-2節は短く, 先端節は長い. 外部形態から雌雄の区別はできなかった.

*Sphaerius* 属は, ヨーロッパに広く分布する *Sphaerius acaroides* Waltl, 1838 をもとに創設された属である. 体長 0.75 mm と非常に微小で, 肉眼ではある種のダニのように見えることから「ダニのような, = *acaroides*」と命名されている. 世界からはヨーロッパをはじめ, アジア, 北~中央アメ

リカ, マダガスカル, オーストラリア, アフリカから20種ほどが知られ, 旧北区からはヨーロッパ, アルジェリア, チュニジア, イスラエル, インド, ネパールなどから8種が記載されている (Löbl, 1995, 2003; Beutel, 2005). 種名が決定されていない記録があるのは日本だけでなく, 近隣では中国からも報告されている (Hall, 2003).

日本における *Sphaerius* 属のこれまでの記録を整理すると, 本州の栃木県 (大桃ら, 2008), 埼玉県 (新井, 2011), 今回の東京都, 四国の愛媛県 (酒井, 2001) から確認されている. これらがすべて同一種であるかどうかは不明である. また, 本属は微小なだけに, 精査が行われれば, 各地で見つかる可能性が高いと予想される.

なお, *Sphaerius* は二枚貝類の1属名 *Sphaerium* に先取されているとして一時 *Microsporoides* の名が当てられており, 日本ではこの属名でも記録されているが, ホモニムには当たらないとして現在 *Sphaerius* は復活しているので (Jäch, 1999; ICZN, 2000), 注意が必要である. これにともない, 科名に関しても *Sphaeriidae* または *Microsporidae* から *Sphaeriusidae* となっている.

最後になったが, 本稿を草するにあたり, SEM

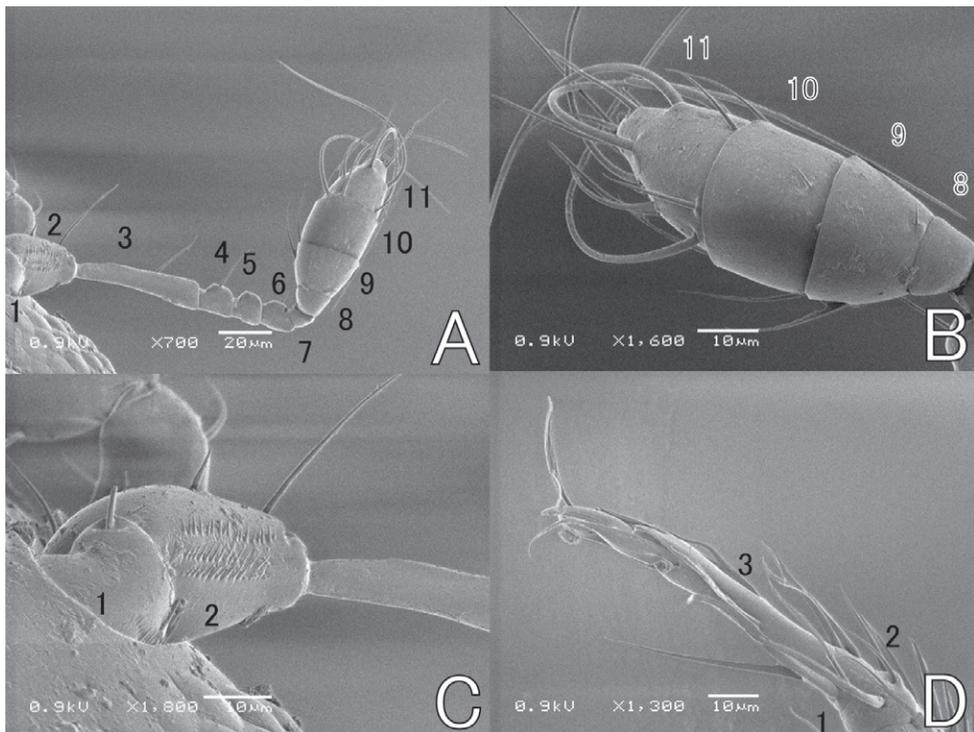


図4. 多摩川産 *Sphaerius* sp. の触角と附節 (A: 右触角; B: 球程部; C: 触角第2節の棘列状構造; D: 右前脚附節。  
※数字は節数を示す)。

による観察・撮影に協力して下さった野村周平博士 (国立科学博物館), 有用な情報を下さった吉富博之博士 (愛媛大学ミュージアム) に心よりお礼を申し上げる。

#### 引用文献

- 新井浩二, 2011. 「埼玉県から新たに記録される甲虫類 (17)」の訂正. 寄せ蛾記, (142) : 28.
- Beutel, R. G., 2005. Myxophaga. Pp. 43–52, in: Beutel, R. G. & R. A. B. Leschen eds., Handbook of Zoology, Volume IV, Arthropoda: Insecta, Part 38, Coleoptera, Beetles, Vol. 1, Morphology and Systematics (Archostemata, Adephaga, Myxophaga, Polyphaga partim). De Gruyter, Berlin / New York.
- Hall, W. E., 2000. 3. Microsporidae Crotch, 1873. Pp. 24–26, in: Arnett, R. H. jr. and Thomas, M. C. eds., American Beetles. Volume 1. Archostemata, Myxophaga, Adephaga, Polyphaga: Staphyliniformia. CRC Press LLC, Boca Raton, Florida.
- Hall, W. E., 2003. Sphaeriidae (Coleoptera). Pp. 37–41, in: Jäch, M. A. and L. Ji, eds., Water Beetles of China. Volume III, Wien.
- ICZN (International Commission on Zoological Nomenclature), 2000. Opinion 1957, *Sphaerius* Waltl, 1838 (Insecta, Coleoptera): conserved; and Sphaeriidae Erichson, 1845 (Coleoptera): spelling emended to Sphaeriidae, so removing the homonymy with Sphaeriidae Deshayes, 1854 (1820) (Mollusca, Bivalvia). Bulletin of Zoological Nomenclature, 57(3):182–184.
- Jäch, M. A., 1999. Case 3052. *Sphaerius* Waltl, 1838 and

- Sphaeriidae* Erichson, 1845 (Insecta, Coleoptera): proposed conservation by the partial revocation of Opinion 1331. Bulletin of Zoological Nomenclature, 56(2):117–120.
- Löbl, I., 1995. New species of terrestrial *Microsporus* from the Himalaya (Coleoptera: Microsporidae). Entomologische Blätter, 91: 129–138.
- Löbl, I., 2003. Suborder Myxophaga Crowson, 1955. Pp. 25–26, in: Löbl, I. & A. Smetana eds., Catalogue of Palaearctic Coleoptera vol. 1 -Myxophaga-. Apollo Books, Stenstrup.
- Matthews, A., 1899. Sphaeriidae. A monograph of the coleopterous families Corylophidae and Sphaeriidae. 209–215pp, pl. viii. O. E. Janson and Son, London.
- 森本 桂, 1986. IV 系統と分類, 甲虫の系統. 森本桂・林長閑編著, 原色日本甲虫図鑑 (I) 142–165pp., 保育社.
- 中根猛彦, 1983. 日本のケシマルムシ主科について. 昆虫と自然, 18(9): 32.
- 大桃定洋・高橋敬一, 2008. 2006–7年に栃木県下で採集した甲虫類. インセクト, 59(1):17–26.
- 酒井雅博, 2001. 日本よりケシマルムシ科を発見. 雑甲虫ニュースレター, (3) : 5–6.
- Satô, M., 1982. Discovery of Torridincolidae (Coleoptera) in Japan. Annotationes Zoologicae Japonenses, (55): 276–283.
- Waltl, J., 1838. Verzeichniss der um Passau vorkommenden seltener Käfer nebst Beschreibung der neuen Arten. Isis von Oken, 4: 263–273.

(2012年4月18日受領, 2012年5月21日受理)

# 琉球列島のシマトネリコで見つかった *Pimelocerus* 属 (コウチュウ目, ゾウムシ科, アナアキゾウムシ亜科) の2種

小島弘昭<sup>1)</sup>・森本 桂<sup>2)</sup>

1) 〒243-0034 厚木市船子1737 東京農業大学昆虫学研究室

2) 〒811-0205 福岡市東区奈多団地20-101

## Two *Pimelocerus* species (Coleoptera, Curculionidae, Molytinae) found on *Fraxinus griffithii* (Oleaceae) in the Ryukyus, Southwest Japan

Hiroaki KOJIMA and Katsura MORIMOTO

Summary: Two species of the molytine weevils of the genus *Pimelocerus* Lacordaire (= *Dyscerus* Faust) were found on the trunks of an ash tree, *Fraxinus griffithii* in the Yaeyama group of the Ryukyus, Southwest Japan. They were identified as *Pimelocerus perforatus* (Roelofs) and *P. galloisi* Kôno. *Fraxinus griffithii* is newly recorded as their host plants, and the occurrence of *P. galloisi* in the Ryukyus are newly confirmed. In particular, the occurrence trend of *Pimelocerus galloisi* should be paid an attention in the Yaeyama group of the Ryukyus in the future since the weevil seems to become common recently even in the open places along the forestry road, where the host is abundant.

シマトネリコ *Fraxinus griffithii* は、琉球列島から、台湾、中国、フィリピン、インドに分布し、別名タイワンシオジとも言われるモクセイ科の常緑～半常緑高木で、寒さにも比較的強いことから、本土でも観葉植物や街路樹として広く流通し、植栽されている。筆者の一人、小島は西表島において、シマトネリコの根際に近い幹にアナアキゾウムシが静止しているのを見つけた (Figs. 1, 2)。その後、島内各地のシマトネリコを注意して見てまわったところ、比較的普通に同じような状態で幹や樹皮の隙間、樹皮下に静止するアナアキゾウムシが見られた。アナアキゾウムシは *Pimelocerus* (= *Dyscerus*) 属に分類されるもので2種からなり、うち1種は現地でオリーブアナアキゾウムシ *Pimelocerus perforatus* (Roelofs) と同定できたが、より普通に見られたもう1種は、詳細な検討が必要と考えられた。そこで、本種について雄交尾器を含めた検討を行なったところ、本土から知られるガロアアナアキゾウムシ *P. galloisi* (Kôno) であることが判明したので、分布ならびに加害植物の新知見として報告する。なお、両種の最近の学名の変更については、小島・森本 (2004) を参照頂きたい。

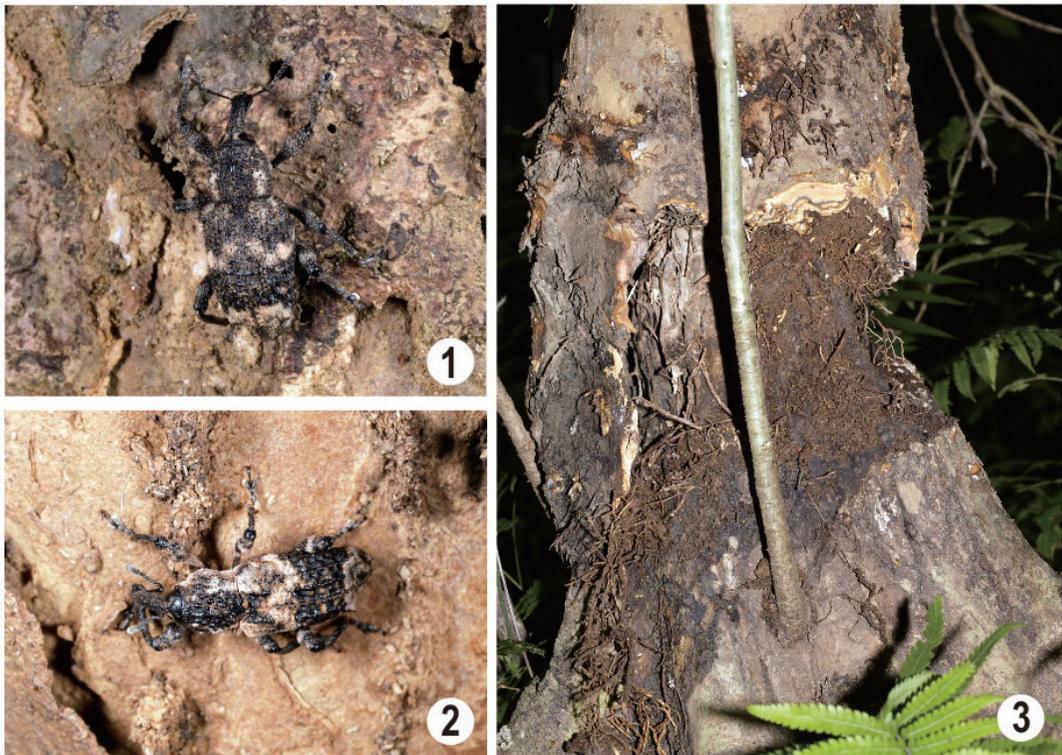
両種とも体長12–15 mm程度の比較的大形のゾウムシで、幼虫は根際の樹皮下を食害し、大発生すると樹木に甚大な被害を及ぼすことが知られており、とくにオリーブアナアキゾウムシは香川県小豆島でオリーブに大害を与え、生態や防除について多くの研究が報告されている (森本, 1962 ;

遠田, 1993)。アナアキゾウムシが発見された根際には、このゾウムシの幼虫によると思われる食害痕が見られる木もあり (図3)、中からは少ないながら幼虫も見つかった。シマトネリコは同島では道路や林道脇の開けた場所にも普通に見られる先駆的植物で、とくにガロアアナアキゾウムシについては、大形の種にも関わらずこれまで見つかっていなかったことを考えると、最近、個体数が増加している可能性があり、八重山諸島における今後の発生動向には注意を払う必要がある。

報告に先立ち、施設利用や入林を快諾頂いた琉球大学熱帯生物圏研究センターならびに沖縄営林署の関係者にお礼申し上げる。また現地調査に協力頂いた金城政勝博士ならびに関東準之助氏、福澤卓也氏の各氏に感謝する。本研究は、一部、科学研究費補助金 (16770067; 研究代表者: 小島弘昭) の助成を受けて行われた。

### 1. オリーブアナアキゾウムシ *Pimelocerus perforatus* (Roelofs, 1873)

本種は関東以西の本州、八丈島、小豆島、四国、九州、琉球 (石垣島、西表島)、台湾、中国に分布し、イボタノキ *Ligustrum obtusifolium*、ネズミモチ *L. japonicum* などを加害するが、輸入栽培したオリーブ植栽地で大発生し、その重要害虫として知られるようになった (遠田, 1993; 本間, 2003)。西表島において少ないながら次種と混生し、シマトネリコより得られたので、新たな加害植物の一つと



Figs. 1–3. Adults and larval feeding trace of *Pimelocerus* species on the trunk of *Fraxinus griffithii* at Shirahama-rindô, Iriomote-jima I., the Ryukyus. 1. Adult of *P. galloisi*; 2, adult of *P. perforatus*; 3: larval feeding trace on the trunk near the root of the host tree.

して記録しておく。

検視標本. 沖縄県八重山郡石垣島, 1 ex., オモト岳, 18–21. iv. 1975, 入江平吉採集 (九大所蔵). 西表島, 1 ex., 28. v. 1962, 小島圭三採集 (九大所蔵); 1 ex., 白浜, 6. viii. 1961, M. Kina (九大所蔵); 1♂, 白浜, 29. xii. 2004, 小島弘昭採集; 1♂, 白浜, 2. i. 2005, 小島弘昭採集; 1♂, 大富林道, 7. iv. 2005, 小島弘昭採集; 1♂, 船浦, 17. iii. 2012, 小島弘昭採集.

## 2. ガロアアナアキゾウムシ *Pimelocerus galloisi* (Kôno, 1934)

本種はこれまでに北海道, 本州, 九州から知られ, シオジ *Fraxinus platypoda* ならびにトネリコ *F. japonica*, ヤチダモ *F. mandshurica* var. *japonica* を加害することが報告されている (森本, 1962, 1982, 1984). 今回, これまでの分布域からは隔たった西表島で見つかった. 本土産と比べると前胸や上翅の白色斑が安定して認められる傾向があるが, 雄交尾器を含めその他の形態形質に種を識別するほどの差異は認められなかった. 石垣島産の標本も検しており, 琉球列島 (八重山諸島) に分布することが明らかとなった. 西表島では道路や林道脇のシマトネリコに比較的普通に見られたが, これ

まで発見されていなかったことを考えると, 近年, 増加傾向にある可能性があり, 今後の発生動向には注意を要する. また, シマトネリコは本土でも街路樹として普通に植栽されており, 本土のガロアアナアキゾウムシによる被害が今後発生する可能性もないとは言えない. なお, 九州大学には, 高知県産ならびに佐渡島産の標本があり, 本種は四国, 佐渡島も分布することをあわせて付記しておきたい.

検視標本 (石垣島産以外はすべて小島弘昭採集). 沖縄県八重山郡石垣島, 1 ex., オモト岳, 23–26. V. 1990, 森本桂採集 (九大所蔵). 西表島, 4♂♂, 2♀♀, 上原, 24–25. xii. 2004; 4♂♂, 白浜, 29. xii. 2004; 2♂♂, 古見, 1. i. 2005; 9♂♂, 1♀, 白浜, 2. i. 2005; 11♂♂, 1♀, 白浜, 10. iv. 2005; 4♂1♀, 白浜林道, 17. iii. 2012.

## 引用文献

- 遠田暢男, 1994. オリーブアナアキゾウムシ. 森林昆虫 総論・各論 (小林富士雄・竹谷昭彦編著): 232. 養賢堂発行, 東京.  
 本間健平, 2003. オリーブアナアキゾウムシ. 日本農業害虫大事典 (梅谷献二・岡田利承編): 576. 全国農村教育協会, 東京.  
 小島弘昭・森本 桂, 2004. 日本産ゾウムシ上科のオンライン目録とデータベース. 九州大学総合研究博物館研究報

告, (2): 33-147.

森本 桂, 1962. 森林害虫として記録されているゾウムシ類の種名について II. クスアナアキゾウムシとその近似種. 林業試験場報告, (143): 1-8, 2 pls.

Morimoto, K. 1982. The family Curculionidae of Japan. I. Subfamily Hylobiinae. Esakia, (19): 51-121.

森本 桂, 1984. ゾウムシ科. 原色日本甲虫図鑑 IV (林匡夫ら編著): 269-345, pls. 53-68. 保育社, 大阪.

(2012年4月23日受領, 2012年5月23日受理)

### 【短報】日本産ハナノミ族数種の記録

ハナノミ科ハナノミ族のうち, 以下の種については, 高桑(2000, 2006, 2007)を参考にすると, 府県未記録種, もしくは本州ないし九州未記録であるなど, 分布的に記録しておくべきものと思われるので報告する. 標本は秋田が所蔵し, 同定および各県における記録の確認については高桑がおこなった.

中峰空, 中西元男, 木村忠睦, 野田亮, 山崎哲郎, 下山良平, 宮田達美, 田中伸一の諸氏には標本を提供していただいた. 感謝したい.

#### オオオビハナノミ *Glipa shirozui* Nakane

兵庫県: 10♂♂, 6♀♀, 三田市福島(有馬富士公園), 13. VII. 2004, 中峰空採集.

日本では屋久島から青森県まで広く分布しているが, 兵庫県ではこれまで北部に限られた場所での記録がなかったようである.

#### アヤオビハナノミ *Glipa ohgushii* (Chûjô)

山口県: 1♀, 周防大島町油良, 28. VII. 2009, 田中伸一採集. 鹿児島県: 1♀, 佐多町杉山谷, 5. VIII. 2004, 野田亮採集.

宮崎・熊本県以北の九州～東海地方にかけて局地的に分布が知られていた. 山口県および中国地方から初めての記録と思われる.

#### カルベオビハナノミ *Glipa karubei* Takakuwa

鹿児島県: 1♀, 佐多町杉山谷, 4. VII. 2004, 野田亮採集.

屋久島から記載された種で, 九州本土からは未記録であった. 佐多町ではほかにもいくつか採集されている(未発表).

#### キボシハナノミ *Hoshihananomia hananomi* (Kôno)

長野県: 1♂, 王滝村御岳, 1500m, 27. VII. 2002, 秋田採集; 1♂, 1♀, 王滝村鈴ヶ沢, 1,300-1,400m, 29-30. VII. 1999, 秋田採集; 1♀, 下諏訪町東俣観音沢林道, 1,350m, 9. VIII. 1999, 下山良平採集; 1♂, 川上村梓山, 1,350-1,400m, 22-24. VII. 1992, 秋田採集.

屋久島から阿武隈まで分布するが, 地域によってはかなり局地的で, これまで長野県では北アルプスの一部にしか記録がなかったようである.

#### オオキボシハナノミ *Hoshihananomia auromaculata nipponica* Nomura

北海道: 5♂♂, 松前町原口, 29. VIII. 1992, 宮田達美採集.

これまで北海道では十勝支庁トムラウシと北見支庁生田原から知られてきたが, 渡島半島からは初めての記録と思われる. 晩夏の採集なので時期的に注目される. なお同地で1990年9月9日に宮田氏が採集した本種の標本多数が神奈川県立生命の星・地球博物館にも収蔵されている.

#### ミツオホシハナノミ *Hoshihananomia mitsuoi* Nakane et Nomura

京都府: 2♀♀, 京都府園部町南大谷, 5. VIII. 2003, 山崎哲郎採集; 1♂, 亀岡市西加舎, 5. VIII. 2003, 山崎哲郎採集.

九州北部から中国地方(おもに瀬戸内地方)を経て愛知・岐阜県まで知られるが, 京都府からはこれまで記録がなかったようである.

#### 引用文献

高桑正敏, 2000. 日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 4. 甲虫ニュース, (129): 1-6.

高桑正敏, 2006. 日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 9. 甲虫ニュース, (154): 1-7.

高桑正敏, 2007. 日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 10. 甲虫ニュース, (157): 1-4.

(秋田勝己 514-1108 津市久居射場町 66, D-304)

(高桑正敏 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館)

# 山形県飛島のゾウムシ上科甲虫相

小島弘昭

〒 243-0034 厚木市船子 1737 東京農業大学昆虫学研究室

## Weevil Fauna of Tobishima Island, off Yamagata Prefecture, Northern Japan

Hiroaki KOJIMA

Summary: A total of 25 species of weevils (Coleoptera: Curculionoidea) are added to the fauna of Tobishima I., off Yamagata Prefecture in the Sea of Japan. As a result, five families and 47 species of weevils excluding Scolytidae and Platypodidae are recognized and enumerated below. Asterisk (\*) after the scientific name indicates the species new to the fauna.

飛島は、粟島、佐渡島とともに、東日本の日本海上に位置し、標高は 60 m、面積は約 2.3 km<sup>2</sup> と 3 島中では最小の島である。北日本に位置するにもかかわらず、対馬海流の影響もありタブノキが優占する常緑広葉樹林に覆われている。

同島に於ける生物相調査は 1800 年代にまでさかのぼることができ、Arthur Adams がイギリス船の乗組員として立ち寄ったのが最初と考えられ、“Tabu-sima” という名前で記録されている (Bates, 1873; 新甲虫学会第 1 回大会特別座談会, 2011)。その後、村井 (1937) や金井・石里 (1941)、白畑・黒沢 (1971) らが同島の昆虫相について報告している。しかし、同島におけるゾウムシ類の記録は、上述の報告中にはなく、比較的最近になって、山谷 (1984) や桜井 (1988)、小野 (1999) によって報告された。これまでに 4 科 22 種が記録されているが、大半の記録は、県内の目録を作成した際記録されたもので、とくに飛島を対象としたものではない。そのため、同島のゾウムシ相調査は現状では十分とは言い難い。2011 年 7 月 26 ~ 30 日に掛け同島を訪問し、多数の分布新記録種を得ることができたので、既知の記録と合わせ以下に報告する。

採集者はヒレルクチプトゾウムシを除きすべて筆者で、標本は東京農業大学昆虫学研究室にて保管している。

報告に先立ち、原稿をご校閲頂いた森本桂博士ならびに飛島に関する文献についての確な情報をご提供頂いた渡辺泰明博士に厚く御礼申し上げる。また、調査に同行し協力頂いた東京農大の村木朝陽、井ノ口哲嗣、大橋謙太郎の各氏に御礼申し上げます。

### ヒゲナガゾウムシ科 Anthribidae

1. カオジロヒゲナガゾウムシ *Sphinctotropis laxa* (Sharp, 1891)\*

1 ex., 高森山, 29-VII-2011. 飛島新記録。  
イタヤカエデの腐朽木より得た。

### オトシブミ科 Attelabidae

2. ヒゲナガオトシブミ *Paratrachelophorus longicornis* (Roelofs, 1874)

文献記録：山谷 (1984) [12-VII-1980].

3. カシルリチョッキリ *Euops splendidus* Voss, 1930

1 ex., 荒崎, 27-VII-2011; 2 exs., 田下, 27-VII-2011; 3 exs., 勝浦, 28-VII-2011; 1 ex., 柏木山～ソデの浜, 28-VII-2011; 12 exs., 勝浦, 29-VII-2011; 1 ex., 八幡崎, 29-VII-2011; 1 ex., 館岩, 29-VII-2011; 4 exs., 柏木山～ソデの浜, 30-VII-2011.

文献記録：桜井 (1988) [2 exs., 25-V-1975].

### チョッキリゾウムシ科 Rhynchitidae

4. ヒメケブカチョッキリ *Involvulus pilosus* (Roelofs, 1874)

文献記録：桜井 (1988) [2 exs., 25-V-1975].

5. コルリチョッキリ *Cartorhynchites apertus* (Sharp, 1889)

文献記録：小野 (1999) ルリデオチョッキリ *Depasophilus apertus* (Sharp) として記録。 [1 ex., 25-VI-1962].

6. ブドウハマキチョッキリ *Byctiscus lacunipennis* (Jekel, 1860)

3 exs., 田下, 27-VII-2011; 1 ex., 勝浦, 29-VII

- 2011.  
文献記録：桜井（1988）[1 ex., 22-VII-1977].
7. クロケシツブチョッキリ *Auletobius uniformis* (Roelofs, 1874)\*  
12 exs., 田下, 27-VII-2011. 飛島新記録.  
ハマナシより得られた.
- ホソクチゾウムシ科 Apionidae**
8. ケブカホソクチゾウムシ *Sergiola griseopubescens* (Roelofs, 1874)\*  
1 ex., 田下, 27-VII-2011; 9 exs., 柏木山～ソデの浜, 28-VII-2011; 6 exs., 八幡崎, 29-VII-2011. 飛島新記録.
- オサゾウムシ科 Dryophthoridae**
9. トホシオサゾウムシ *Aplotes roelofsi* (Chevrolat, 1882)  
文献記録：山谷（1984）[28-VI-1981].
- ゾウムシ科 Curculionidae**
10. コナラシギゾウムシ *Curculio dentipes* (Roelofs, 1874)  
文献記録：桜井（1988）[2 exs., 20-VI-1957]
11. イチゴハナゾウムシ *Anthonomus bisignifer* Schenkling, 1934\*  
1 ex., 荒崎, 27-VII-2011; 3 exs., 田下, 27-VII-2011; 1 ex., 八幡崎, 27-VII-2011. 飛島新記録.
12. チビコバンゾウムシ *Miarus vestitus* Roelofs, 1875\*  
3 exs., 荒崎, 27-VII-2011; 9 exs., 田下, 27-VII-2011; 28 exs., 八幡崎, 27-VII-2011; 2 exs., 勝浦, 29-VII-2011; 85 exs., 館岩, 29-VII-2011. 飛島新記録.  
ツリガネニンジンより得た.
13. マダラヒメゾウムシ *Baris orientalis* Roelofs, 1875\*  
2 exs., 荒崎, 27-VII-2011. 飛島新記録.
14. クワヒメゾウムシ *Moreobaris deplanata* (Roelofs, 1875)\*  
1 ex., 荒崎, 27-VII-2011. 飛島新記録.
15. アカアシクチブトサルゾウムシ *Rhinoncus cribricollis* Hustache, 1916\*  
2 exs., ソデの浜, 28-VII-2011; 3 exs., 勝浦, 29-VII-2011. 飛島新記録.
16. ミドリクチブトゾウムシ *Cyphicerus viridulus* (Roelofs, 1873)  
文献記録：桜井（1988）[1 ex., 20-VI-1976].
17. チビメナガクチブトゾウムシ *Calomycterus setarius* Roelofs, 1873\*  
2 exs., 勝浦, 28-VII-2011. 飛島新記録.
18. ヒレルクチブトゾウムシ *Pseudoedophrys hilleri* (Faust, 1889)\*  
1 ex., 中村, 28-VII-2011, 大橋謙太郎採集. 飛島新記録.
19. イコマケシツチゾウムシ *Trachyphloeosoma advena* Zimmerman, 1956\*  
11 exs., 高森山, 28-VII-2011; 10 exs., 柏木山, 29-VII-2011 (すべてベルレーゼ装置で抽出). 飛島新記録.
20. チビツチゾウムシの1種 *Trachyphilus* sp.\*  
1 ex., 高森山, 28-VII-2011 (ベルレーゼ装置で抽出). 飛島新記録.  
地域分化が著しい属で, 現在, 森本桂博士により本属の分類学的研究が進められている.
21. ヒメシロコブゾウムシ *Dermatoxenus caesicollis* (Gyllenhal, 1833)  
6 exs., 八幡崎, 27-VII-2011 (on *Aralia elata*); 1 ex., 田下, 27-VII-2011; 1 ex., 高森山, 28-VII-2011; 3 exs., 柏木山～勝浦, 30-VII-2011 (on *Hedera rhombea*).  
文献記録：桜井（1988）[1 ex., 13-VII-1985].
22. シロコブゾウムシ *Episomus turritus* (Gyllenhal, 1833)  
2 exs., 勝浦, 28-VII-2011; 1 ex., 高森山, 28-VII-2011.  
文献記録：桜井（1988）[2 exs., 26-VII-1963].
23. カキゾウムシ *Pseudocneorhinus obesus* Roelofs, 1873  
文献記録：桜井（1988）[1 ex., 8-VII-1958].
24. ハリゲスグリゾウムシ *Pseudocneorhinus adamsi* Roelofs, 1880  
文献記録：桜井（1988）[2 exs., 26-VI-1975].
25. チビスグリゾウムシ *Pseudocneorhinus minimus* Roelofs, 1879\*  
1 ex., 勝浦, 28-VII-2011. 飛島新記録.

26. スナムグリヒョウタンゾウムシ *Scepticus tigrinus* (Roelofs, 1873)\*  
21 exs., ソデの浜, 28-VII-2011. 飛島新記録.
27. コフキゾウムシ *Eugnathus distinctus* Roelofs, 1873  
31 exs., 荒崎, 27-VII-2011; 1 ex., 田下, 27-VII-2011; 8 exs., 八幡崎, 27-VII-2011; 17 exs., 勝浦, 28-VII-2011; 11 exs., 八幡崎, 29-VII-2011; 1 ex., 勝浦, 29-VII-2011; 3 exs., 柏木山~勝浦, 30-VII-2011.  
文献記録: 桜井 (1988) [1 ex., 18-VIII-1963].
28. ハコベタコゾウムシ *Hypera basalis* (Voss, 1937)\*  
1 ex., 勝浦, 29-VII-2011. 飛島新記録.
29. ゴボウゾウムシ *Larinus latissimus* Roelofs, 1873  
文献記録: 桜井 (1988) [1 ex., 26-VI-1975].
30. カツオゾウムシ *Lixus impressiventris* Roelofs, 1873  
1 ex., 八幡崎, 27-VII-2011; 1 ex., 勝浦, 28-VII-2011; 4 exs., 柏木山~ソデの浜, 28-VII-2011; 3 exs., 勝浦, 29-VII-2011; 2 exs., 八幡崎, 29-VII-2011; 1 ex., 勝浦, 29-VII-2011.  
文献記録: 桜井 (1988) [2 exs., 22-VII-1977].
31. アイノカツオゾウムシ *Lixus maculatus* Roelofs, 1873  
5 exs., 八幡崎, 27-VII-2011; 1 ex., 八幡崎, 29-VII-2011; 1 ex., ソデの浜, 28-VII-2011; 2 exs., 勝浦, 29-VII-2011; 2 exs., 八幡崎, 29-VII-2011.  
文献記録: 桜井 (1988) [1 ex., 22-VII-1977].
32. ナガカツオゾウムシ *Lixus depressipennis* Roelofs, 1873  
文献記録: 小野 (1999) [5 exs., 25-VI-1962].
33. ハスジカツオゾウムシ *Lixus acutipennis* (Roelofs, 1873)  
1 ex., 八幡崎, 27-VII-2011; 1 ex., 勝浦, 28-VII-2011; 3 exs., 八幡崎, 29-VII-2011.  
文献記録: 山谷 (1984) [10-VI-1979].
34. ツツゾウムシ *Carcilia strigicollis* Roelofs, 1874  
文献記録: 桜井 (1988) [2 exs., 22-VII-1977].
35. コゲチャツツゾウムシ *Carcilia tenuistriata* Heller, 1941\*  
3 exs., 勝浦, 28-VII-2011; 8 exs., 高森山, 28-VII-2011; 7 exs., 勝浦, 29-VII-2011; 1 ex., 柏木山~勝浦, 30-VII-2011. 飛島新記録.  
カシワ, イカヤカエデから得られた. 桜井 (1988) は同属のツツゾウムシを飛島より記録したが, 今回得られたものはすべてコゲチャツツゾウムシであった.
36. ホホジロアシナガゾウムシ *Merus erro* (Pascoe, 1871)  
文献記録: 桜井 (1988) [1 ex., 26-VII-1975].
37. オジロアシナガゾウムシ *Ornatalcidodes trifidus* (Pascoe, 1870)  
1 ex., 柏木山~ソデの浜, 28-VII-2011; 1 ex., 高森山, 28-VII-2011; 2 exs., 八幡崎, 29-VII-2011.  
文献記録: 桜井 (1988) [1 ex., 13-VII-1975].
38. ホソアナアキゾウムシ *Pimelocerus elongates* (Roelofs, 1873)\*  
1 ex., 荒崎, 27-VII-2011; 1 ex., 柏木山~勝浦, 30-VII-2011. 飛島新記録.
39. クロクチカクシゾウムシ *Catagmatys japonicus* Roelofs, 1875\*  
3 exs., 柏木山~勝浦, 30-VII-2011. 飛島新記録.
40. ヒサゴクチカクシゾウムシ *Simulatacalles simulator* (Roelofs, 1875)\*  
11 exs., 荒崎, 27-VII-2011; 2 exs., 田下, 27-VII-2011; 1 ex., ソデの浜, 28-VII-2011; 2 exs., 高森山, 28-VII-2011 (うち1個体はベルレーゼ装置で抽出); 5 exs., 勝浦, 29-VII-2011; 15 exs., 柏木山~勝浦, 30-VII-2011. 飛島新記録.
41. マツノシラホシゾウムシ *Shirahoshizo insidiosus* (Roelofs, 1875)\*  
2 exs., 勝浦, 29-VII-2011. 飛島新記録.
42. コマツノシラホシゾウムシ *Shirahoshizo pini* Morimoto, 1962\*  
2 exs., 勝浦, 29-VII-2011. 飛島新記録.
43. アシナガオニゾウムシ *Gasterocercus longipes* Kôno, 1932  
1 ex., 八幡崎, 27-VII-2011 (頭および前胸部を欠く死亡個体).  
文献記録: 桜井 (1988) [4 exs., 9-V-1976].
44. ヒメクチカクシゾウムシ *Syrotelus umbrosus*

(Roelofs, 1875) \*

1 ex., 柏木山～勝浦, 30-VII-2011. 飛島新記録.

45. チャバネクイゾウムシ *Kojimazo lewisii* (Wollaston, 1873) \*

1 ex., 高森山, 28-VII-2011. 飛島新記録.

46. ハマベクイゾウムシ *Dryothribus mimeticus* Horn, 1873\*

10 exs., オボゲの浜, 29-VII-2011; 2 exs., 柏木山～勝浦, 30-VII-2011. 飛島新記録.

47. アカネニセクチプトゾウムシ *Stenoscelodes hayashii* Konishi, 1962\*

1 ex., 柏木山～勝浦, 30-VII-2011. 飛島新記録.

#### 考察

今回の調査で1科25種が新たに追加され、飛島のゾウムシ相は5科47種となった。同島のゾウムシ相の特徴として、他地域ではそれほど個体数が多くない、コゲチャツツゾウムシがカシワやイタヤカエデで、チビコバンゾウムシがツリガネニンジンで多く見られたことが上げられる。

また、ブナ科植物がカシワとクリ程度しか見られず、株数も少ないためか、ブナ科利用の *Orchestes* 属のノミゾウムシ族や、*Nothomylocerus* 属、*Lepidepistomus* 属、*Lepidepistomodes* 属のクチプトゾウムシ族が見つかっていない。

さらに、タブノキ(クスノキ科)やツバキ、ヒサカキ(ツバキ科)などの常緑樹が多いにも関わらず、それらに依存する *Imachra* 属のノミゾウムシ族や、シギゾウムシ属 (*Curculio*)、マルゾウムシ属 (*Phaeopholus*) などのゾウムシ類も見つっていない。

これらのことを確認する上でも、5～6月、9月など、今回とは異なる時期の調査が今後は望まれる。

#### 引用文献

Bates, H. W., 1873. On the geodephagous Coleoptera of Japan. Transactions of the Entomological Society of London, (1873): 219-322.

金井 茂・石里秋生, 1941. 山形県飛島の昆虫相 (第1報), 自然研究, (8): 23-24.

村井貞固, 1937. 飛島の生物相—飛島の昆虫相—, 荘内博物学会研究録, (2): 85-92.

小野精美, 1999. 飛島の甲虫6種. 山形昆虫同好会誌, (28): 16.

桜井俊一, 1988. 山形県の甲虫類 (VIII). 山形昆虫同好会誌, (13): 1-10.

新甲虫学会第1回大会特別座談会, 2011. 大林延夫(司会), 上野俊一・森本 桂・渡辺泰明(話題提供者), 日本の甲虫学研究史, さやばねニューシリーズ, (2): 1-17.

白畑孝太郎・黒沢良彦, 1972. 鳥海山・飛島の昆虫類. 山形県総合学術調査会(編), 鳥海山・飛島, pp. 218-262. 山形県.

山谷文仁, 1984. 山形・宮城のゾウムシ. 山形昆虫同好会誌, (13): 26-30.

(2012年4月23日受領, 2012年5月23日受理)



Tshernyshev, S.E., 2011. First record of *Cordelepherus pseudofaustus* Tshern., 2009 (Coleoptera, Malachiidae) in Japan. Euroasian Entomological Journal, 10(2): 136.

Tshernyshev, S.E., 2012. Two new species of soft-winged flower beetles of the genus *Kuatunia* Evers, 1945-48 (Coleoptera, Malachiidae) from China and northeastern Russia. Zootaxa, 3191: 56-64.

日本産ジョウカイモドキ科については、吉富・林(2011, 本誌(2): 18-24) がリストを纏めたが、その後上記の2本の論文が出ているので紹介する。

前者では *Cordelepherus pseudofaustus* Tshernyshev, 2009 が九州(熊本県山鹿市菊鹿町矢谷)から記録された。本種は極東ロシアから記載された種であり、日本から知られる同属のナガサキアオジョウカイモドキ *Cordelepherus xantholoma* (Kiesenwetter, 1874) とは大きさや触角の形状が異なるようだが、区別点は曖昧である。過去の文献と標本をもう一度見直す必要があるかも知れない。

後者は *Kuatunia* 属2種をロシアと中国からそれぞれ記載している。日本産2タクサ(2亜種)も含まれた検索表が付いていて有用である。本属に関してもまた、再検討が必要と考えられる。

(愛媛大学ミュージアム 吉富博之)

### 【短報】神奈川県におけるルリカミキリによるセイヨウベニカナメモチへの加害例

ルリカミキリ *Bacchisa fortunei japonica* は、果樹、園芸品種を含む広くバラ科植物を寄主とすることが知られており（武田，2007；新井・日下部，2008；小島・中村，2011），33種が記録されている。神奈川県内では、低地部の雑木林周辺のカマツカ（別名ウシコロシ）*Pourthiaea villosa* などから確認されていたが、都市化に伴ってその生育環境が衰退し、県レッドデータ生物調査報告書において絶滅危惧種Ⅱ類に指定されている。一方、公園や緑地、庭などに植栽されているカナメモチとオオカナメモチの園芸雑種であるセイヨウベニカナメモチ（レッドロビン）*Photinia glabra* × *P. serrulata* で近年本種による加害が頻繁に確認、観察されているが、その寄主植物としての記録は少ない。筆者は神奈川県内の3箇所下記のように幼虫の加害と、成虫およびその後食を確認しているため、寄主植物と分布資料として記録しておく。

[採集，確認データ] 厚木市船子（東京農大キャンパス内）：被害木，15. XI. 2009，日下部確認。横浜市都筑区荏田南：幼虫および被害木，2. I. 2010，日下部確認；4♂，3♀，29. V. 2010；大木裕・日下部採集。横浜市緑区長津田町：被害木，5. V. 2011；岩田隆太郎・日下部確認。

ルリカミキリの幼虫は主幹部もしくは、そこから派生する太い部位を加害し、その食害痕は顕著で、樹皮下から繊維状の木屑が噴出しているため、明瞭に確認できる（図1）。また、同じセイヨウベニカナメモチを加害するリンゴカミキリ *Oberea japonica* は、成長点付近の細い部位を幼虫が食害していることなどから、その識別は容易である（図2）。新井・日下部（2008）が、リンゴカミキリとセイヨウベニカナメモチについて東京都内での観察例を報告しているように、今後本種も、その植栽頻度の増加にともなう生息域の広がりに注目し、園芸害虫としての認識が必要になるものと考え。また、セイヨウベニカナメモチを食害している個体群は、従来カマツカなどを加害していたものが人為的環境へと移行してきたのか、また苗木とともに他地域から持ち込まれたものなのかは、別の意味で注目する必要があると考える。今後、リンゴカミキリも併せてセイヨウベニカナメモチでの動態を見守っていききたい。また他地域の状況についてもデータの集積が期待される。

末筆ではあるが、本報告をまとめるに当たって採集・加害確認のデータを提供していただいた大木裕（横浜市）、岩田隆太郎（日本大学）の各氏と、



図1. セイヨウベニカナメモチに対するルリカミキリ幼虫の食害痕（神奈川県厚木市，2009年9月15日）。

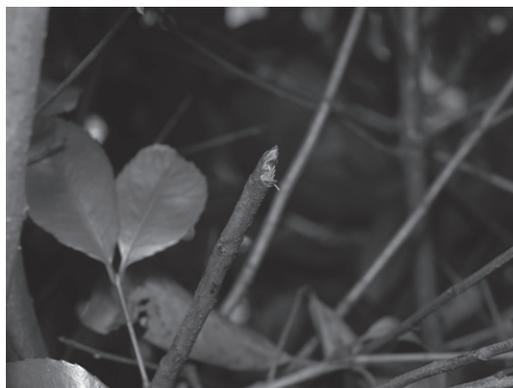


図2. セイヨウベニカナメモチに対するリンゴカミキリ幼虫の食害痕（東京都豊島区，2008年6月24日）。

植物について多くのご教示を賜った高知県立牧野植物園の田中伸幸氏に心からお礼申し上げる。

#### 引用文献

- 新井孝雄・日下部良康，2008. リンゴカミキリがセイヨウベニカナメモチを加害. 月刊むし，(445)：43-44.  
 廣田嘉雅・三木三徳・八木正道，2001. 兵庫県のカミキリムシ. 104 pp., 青桐社.  
 岩田久仁雄，1980. 昆虫を見つめて五十年 (IV)，リンゴとルリカミキリ. Pp. 215-232. 朝日新聞社.  
 加藤敦史・水野弘造・岩田隆太郎，1995. 奈良県のカミキリムシ. 関西甲虫談話会資料 No. 10, 149 pp., 関西甲虫談話会.  
 小島圭三・中村慎吾，2011. 日本産カミキリムシ食樹総目録(改訂増補版). 比婆科学教育振興会. 506 pp.  
 三宅 武，2009. 大分県のカミキリムシ. 昆虫文献六本脚. 134 pp.  
 鈴木正雄，2009. カミキリムシに魅せられて. 山と溪谷社. 128 pp.  
 武田雅志，2007. 寄主植物一覧. 日本産カミキリムシ(大林・新里編). Pp. 683-773. 東海大学出版会.

(日下部良康 224-0013 横浜市都筑区すみれが丘 21-12)

### 【短報】房総半島におけるツツイキバナガミズギワゴミムシの発見

ツツイキバナガミズギワゴミムシ *Bembidion (Desarmatocillemus) tsutsuii* (Uéno, 1955) は、トカラ列島中之島産の標本をもとに記載された潮間帯性のミズギワゴミムシである。タイプ産地のほか奄美大島 (森田ら, 1996), 屋久島 (Nakane, 1956), 九州の長崎県 (松尾ら, 2008), 本州太平洋側の愛知県 (佐藤, 1965), 静岡県 (多比良ら, 2000) の河口域あるいは海岸部から生息情報がある。このうち愛知県から最初に見つかった知多半島新舞子の産地では再発見されず、護岸工事が行われたことから絶滅したと考えられている (岩崎ら, 1990)。その後、愛知県下では森田ら (1996) により豊橋市の豊川河口域で新たな産地が発見されたが、自然海岸の減少などにより、全国的に本種の生息が

脅威に晒されている状況に変わりはない。こうした現況をふまえ、2007年10月5日に更新された環境省の最新版レッドリストには、準絶滅危惧種としての掲載がある。

筆者は、これまで生息が確認されていた伊豆半島より東の千葉県房総半島で本種を採集しているので報告する。

1♂, 1♀, 千葉県南房総市白浜町白浜, 19. III. 2012; 7♂♂, 5♀♀, 同地, 7-8. IV. 2012, 筆者および森田誠司氏保管。

採集地点は岩礁周辺の潮間帯の砂礫地で、付近に大河川の流入はなく、満潮時には30 cm ~ 1 m ほど水没するような場所だった。この時期、干潮時に日中、夜間を問わずに活動していた。ただし、

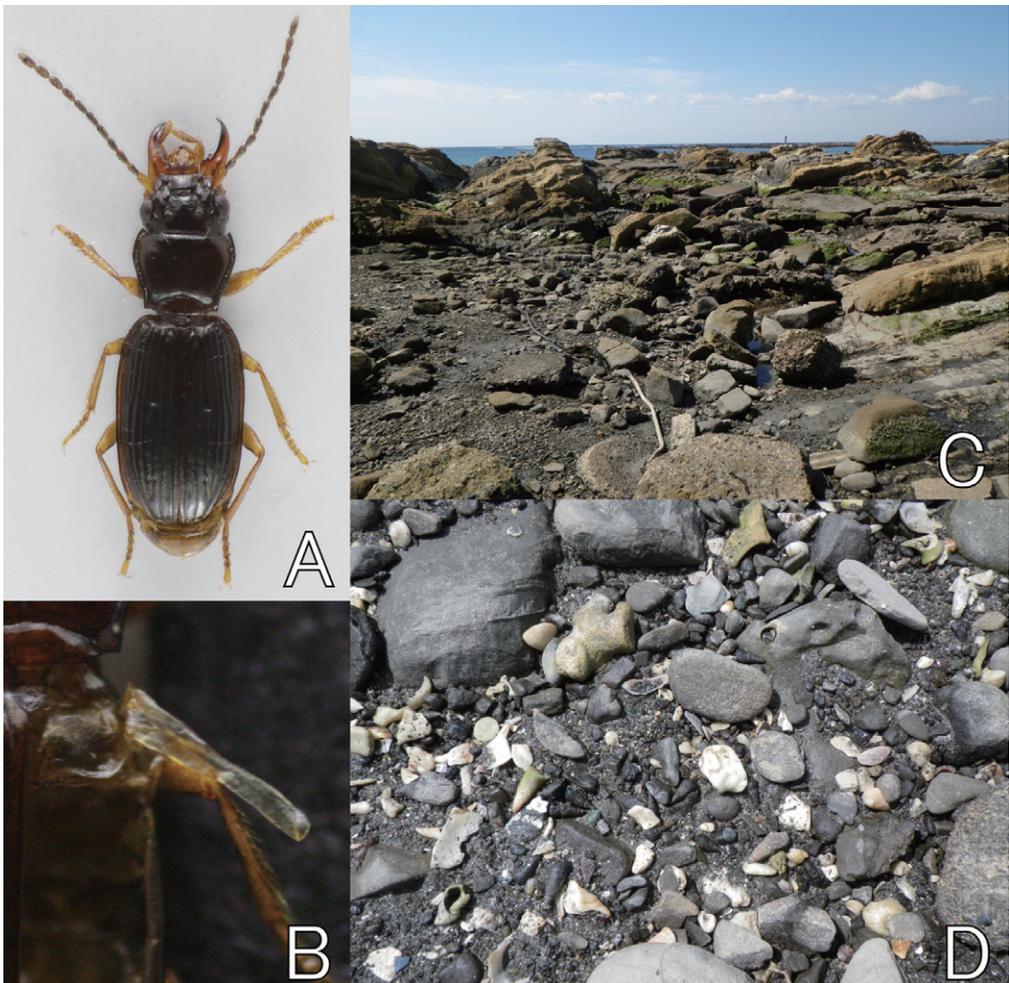


図1. ツツイキバナガミズギワゴミムシとその生息環境。A:♂ (房総半島産) ; B: 右後翅, 上翅を外して示す ; C, D: 生息環境。

地表面を頻りに露出的に徘徊しているのは干潮時の一定の時間帯に限られ、その後は石の下で見つかる個体が多くなり、交尾をしているペアも観察された。

2地点での生息を確認したが、1地点の確認範囲はかなり狭く、個体密度もごく低かった。もう1地点はある程度の個体数がみられたが、やはり確認範囲は広くはなく、工事等が行われれば、容易に生息環境が消滅するような状況と見なされた。

本種は後翅が細長い舌状で、上翅長の半分にも満たないほどに縮小しており、飛ぶことはできない。このため、移動能力は低いことが予想され、連続的ではない生息地の消失が個体群の存続におよぼす影響は小さくないと考えられる。

ところで、森田ら(1996)は豊橋市における本種の生息状況から、生息条件の一つと考えられる環境の底質にかかわるキーワードとして、「白い砂」を挙げた。筆者が観察した南房総のミクロな生息環境では、底質に貝殻の破片は混じるものの石英をあまり含まないためか、砂の白さは特に目立ってはいなかった。今回確認された個体群には他地域のものとは比べて軽微ながら黒化の傾向が認められたが、榎戸(1991)や芦田(1998)がカワラハンミョウ *Chaetodera laetescripta circumpectula* (Horn, 1938) で示唆したように、本種の場合も体色は底質の色とある程度同調している可能性がある。

同所的にはナギサハネカクシの一種 *Bryothinus* sp. や巻貝のホソウミナナなどがみられたが、これらの生物が確認されても、本種が見つからない環境も少なくはなかった。Uéno (1955) は、トカラ列島中之島において本種と同所的にみられる無脊椎動物として、甲殻類のカニダマシ類、棘皮動物のムラサキクルマナマコやウデフリクモヒトデを挙げたが、南房総ではこれらやその近縁種は見いだしていない。

一方で、Sasakawa (2007) は、地理的にはタイブ産地に相対的に近い屋久島産の個体群を上翅の色彩と交尾器形態の差異によって別種 *Bembidion* (*Desarmatocillenus*) *yakushimanum* として分離した。本種または本種群は、南房総のみならず他地域の個体群も含めて分類上の再検討をする余地があると思われる。今回、検鏡して原記載と照らした結果、現時点では南房総産の個体群はツツイキバナガミズギワゴミムシと同定するのがもっとも妥当と考えられた。前述したように体色は黒みが強い傾向にあるが、個体によっては豊橋市産、さらには屋久島産とも大差はなく、♂交尾器外形も原記載の図、豊橋産との比較でも顕著な違いは認められない。

なお、千葉県からは森田(1982)をはじめ、最近では谷野(2007)により、このグループのゴミムシ類はキバナガミズギワゴミムシ *Bembidion* (*Dersarmatocillenus*) *yokohamae* (Bates, 1883), オオキバナガミズギワゴミムシ *B. (D.) sumaoi* Morita, 1981, キバネキバナガミズギワゴミムシ *B. (D.) aestuarii* (Uéno and Habu, 1954) の3種がこれまで報告されている。本種が千葉県のファウナに加わることで、本土では千葉県沿岸部がこのグループの多様性をもっとも高い地域のひとつとなった。

末筆ながら、文献の問い合わせに応じてくださった森田誠司氏(東京都)、多比良嘉晃氏(静岡市)に心よりお礼申し上げる。

#### 引用文献

- 芦田 久, 1998. カワラハンミョウの分布と変異. 月刊むし, (333): 5-9.
- 榎戸良裕, 1991. ハンミョウ類, 観察と採集のポイント. 昆虫と自然, 26(10): 16-21.
- 岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 309-338pp. 愛知県の昆虫(上), 愛知県自然保護課.
- 環境省, 2007. 報道発表資料 レッドリストの修正について. 添付資料 資料2 修正版レッドリスト昆虫類(平成19年10月5日) <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8886>
- 松尾照男・深川元太郎, 2008. ツツイキバナガミズギワゴミムシ長崎県の記録. 甲虫ニュース, (163): 8.
- 森田誠司, 1982. 千葉県小櫃川のキバナガミズギワゴミムシ類. 甲虫ニュース, (55): 6.
- 森田誠司・白井勝巳・蟹江 昇・長谷川道明, 1996. 愛知県におけるキバナガミズギワゴミムシ類の採集記録. 豊橋市自然史博物館研報, (6): 27-30.
- Nakane, T., 1956. On a new species of *Armatocillenus* and its allies in Japan (Harpalidae: Trechinae). *Insecta Matsumurana*, (19): 101-104.
- Sasakawa, K., 2007. Taxonomic studies on the *Bembidion* ('*Cillenus*') complex: A revision of the subgeneric taxonomy and description of a new species from Japan. *Zootaxa*, (1575): 35-45.
- 佐藤正孝, 1965. 海に住む昆虫. 井波一雄編, 名古屋の自然, 166 pp., 六月社, 大阪.
- 多比良嘉晃・松本雅道, 2000. 静岡県における海岸性甲虫相. 環境システム研究, (7): 39-71.
- Uéno, S. -I. 1955. Marine insects of the Tokara Islands. VII. New species and new subspecies of the subfamily Trechinae (Coleoptera, Harpalidae). *Publications of the Seto Marine Biological Laboratory*, (4): 403-413.
- 谷野泰義, 2007. 千葉県で採集した海棲のゴミムシ. 房総の昆虫, (39): 59-62.

(亀澤 洋 350-0825 川越市月吉町 32-17)

### 【短報】ハイマツマキムシモドキを奥秩父で採集

埼玉県の奥秩父でフライトインターセプショントラップを用いた採集を実施した際、見慣れぬ甲虫を採集した筆者は、これが自身でどうにも同定できない代物であったため、甲虫類全般に広く見識をお持ちである神奈川県平野幸彦氏に標本画像を送って確認していただいた。平野氏によれば、マキムシモドキ科の種で、日本から未記録の属であるとのことであった。インターネットで調べてみると、北米などから同様の仲間が知られていることが確認できたが、結局埼玉の個体については正体を確かめる術もなくそのまま放置することとなった。ところが最近になり、初宿ら(2012)によりこの仲間が紹介され、日本からやっと記録されたことを知った。初宿ら(2012)を基に早速同定してみると、前胸側縁に広い平圧部があることや、上翅上面が平坦で凹みがないことなどから、日本産3種のうちのハイマツマキムシモドキと同定できた。この種は頭部の複眼後方付近に単眼を備えるとのことである

が、標本の状態が頭を持ち上げてあったため、この単眼は観察できない状態であった。この「単眼」については、初宿ら(2012)に掲載された写真を見ても、どこが単眼なのか明確には分らないが、もともとこの虫自体が体長3mmに満たない非常に小さな種で



図1. 埼玉県十文字峠産ハイマツマキムシモドキ.

あり、高倍率の実態顕微鏡をもってしても頭部の表面の観察は困難であることから考えて、簡易な同定には不向きな形質であると考えられる。

また、これまで知られる本種の分布は、青森の八甲田山のハイマツ帯と、静岡県南アルプス光岳(標高2,540 m)の2箇所であり、今回の記録はこの間に位置するものである。ハイマツの自生地は国内でも高標高地に限定され、その多くは隔離状態にあるが、採集地である十文字峠付近にはハイマツがわずかながら自生しており、さらに国立公園の特別保護地域にも指定されている、より標高の高い甲武信ヶ岳(標高2,475 m)周辺にはハイマツの群落もあることから、これらのハイマツには本種の寄主であるキタマツカサアブラムシが生息していることが容易に想像できるので、本種の生息条件としては十分であると考えられる。

採集データを以下に記す。

ハイマツマキムシモドキ *Laricobius kovalevi* Nikitsky, 1992

lex., 埼玉県秩父市十文字峠付近(標高2,020 m) 11-18. VI. 2006, 筆者採集(フライトインターセプショントラップによる), 保管(図1).

末筆ではあるが、本種の同定に際して有用な情報をご教示頂いた小田原市の平野幸彦氏に厚く御礼申し上げます。

### 引用文献

初宿成彦, M. E. Montgomery & R. A. B. Leschen, 2012. 2011年に日本から記録された *Laricobius* 属3種について(マキムシモドキ科). さやばねニューシリーズ, (5): 11-15.

(新井浩二 355-0216 比企郡嵐山町むさし台 3-22-13)

### 【短報】アトキリゴミムシ類の生態に関する覚書きはじめに

アトキリゴミムシ類には特殊な生態や食性を示す種類がいくつか知られており、大変に興味深いグループであるが、そのほとんどは明らかになっていない。また、その特殊な生態に起因するためか、なかなか得難い種類がいくつか含まれている。たとえば、ヌバタマノクロアトキリゴミムシ *Setolebia nubatama* やアリスアトキリゴミムシ *Lachnoderma asperum* などはその好例だろう。前者はヤマトヨダンハムシ *Paropsides duodecimpustulata* の狭食性捕食者であることが示唆され(松本ほか, 1996)、また後者はケアリ類 *Lasius* spp. との不思議な関係事例が報告されている(森, 1997; 豊田, 2000, 森; 2006)。

筆者らは比較的記録の少ない2種のアトキリゴミムシ類について、まとまった個体数を採集・観察する機会に恵まれた。食性等に係わる重要な生態観察には至っていないが、今後の生態解明に資することを期待し、採集経験・観察状況について少し詳しく報告しておきたい。文中、種名末の～ゴミムシまたは～アトキリゴミムシをしばしば省略する。

クロサヒラタアトキリゴミムシ *Parena (Parena) kurosai* Habu, 1967

本種は東京都高尾山付近の標本をもとに記載された比較的大型のアトキリゴミムシで、本州・九州に分布するが一般には希な種類である。これまでに公表された記録の多くは単体の採集記録であ

り、生態情報には甚だ乏しい。筆者のひとり森は、京都府福知山市において、エノキ *Celtis sinensis* var. *japonica* の若葉や、ウメ *Prunus mume*、クリ *Castanea crenata* の葉上などから比較的多くの個体をまとめて採集・観察する機会があった。記録は以下のとおりである。

【採集記録】京都府福知山市猪崎 由良川河川敷 11exs., 9-V-2010 (エノキ高所の若葉スweep); 10exs., 5-VI-2010 (ウメの枝葉ビーティング); 22exs., 17-VII-2010 (ウメ, クリの枝葉ビーティング); 7exs., 10-VIII-2010 (ウメ, クリの枝葉ビーティング), 以上すべて森正人採集 (図1)。

当該地では、これ以外の日にも調査したが、本種が全く見られないこともあった。5月の個体はやや未成熟を含む新鮮な個体群であり、6~7月には個体数が多く、すべてが成熟個体であった。また、8月の個体はすべて未成熟な軟弱個体であった。このことから、本種の成虫発生が春と夏の年2化であると示唆される。本種が得られたウメやクリは農作果樹由来の放置木で背が低く、目視観察によっても何頭か発見できたが、日中は葉間や葉裏などに潜んでおり (図2)、活動している様子はなかった。同時に見られた昆虫類は多く、エノキではウストラフコメツキ、ヤツボシハムシ、エノキハムシ、ウメ・クリではジョウカイボン、ウメチビタマムシなどの数が多かったが、当時は肝心の鱗翅目幼虫についての観察を怠っていた。

本種と同属で類似のオオヨツアナアトキリゴミムシ *Parana perforata* は、クワゴマダラヒトリ *Spilarctia imparilis* (鱗翅目) の狭食性捕食者であることが古くから知られており、多くの研究報告が



図1. クロサヒラタアトキリゴミムシ (由良川産; 左♀, 右♂)。



図2. クリの葉裏に潜むクロサヒラタアトキリゴミムシ (由良川)。

ある (たとえば、土生ほか, 1967; 本藤, 1984)。また、ヒラタアトキリゴミムシ *Parana cavipennis* についても、チャドクガ *Euproctis pseudocorpersa* (鱗翅目) の3齢幼虫群を捕食する観察例が報告されており (黒沢, 1992)、クロサヒラタも同様に特定の鱗翅目幼虫の捕食者である可能性がある。

ヒコサンジュウジアトキリゴミムシ *Lebia* (*Poecilothais*) *hikosana* Habu, 1955

この種は福岡県英彦山の標高1,000 m付近の樹皮下で得られた2個体を基に記載された。その後の記録は少なく、英彦山付近では北岳と古処山での記録 (高倉, 1972, 1974) があるが、ともにケヤキ樹皮下で採集されている。英彦山以外では、伊豆大島・御蔵島・関東の一部 (松本, 2000)、神奈川県横浜市・大和市・茅ヶ崎市 (神奈川昆虫談話会, 2004)、静岡県などの記録しかなく、今のところ妙な分布傾向を示している。甲虫図鑑 (上野ほか, 1985) には図版が掲載されておらず、一般になじみが薄いことも記録の少ない原因とされている (松本, 2000)。

本種は体長が4.5 mmと比較的小型で、フタホシアトキリ *L. bifenestrata* やホシハネビロアトキリ *L. calycophora* と同サイズであるが、斑紋は特徴的で比較的安定しており区別はしやすい (図3)。また、♂の中脛節端部内側には2箇所 (♀は1箇所) の切れ込みがある (上記2種の切れ込みは1箇所) 顕著な特徴を持っている。これまで本種の生態情報としては、樹皮下に潜むこと以外知られていない。

筆者のひとり古巻は、茨城県取手市周辺のイボタノキ *Ligustrum obtusifolium* のビーティングやスweepingで、数多くの個体を採集・観察することができた。データは以下のとおりである。

【採集記録】茨城県取手市神住小貝川: 8exs.,



図3. ヒコサンジュウジアトキリゴミムシ（茨城県産；左♂，右♀）。

7-V-1993；14exs., 6-V-1995；2exs., 4-V-1996. 取手市小文間（利根川）：1ex., 9-V-1999；2exs., 28-IV-2006；3exs., 30-IV-2008. 取手市上高井：19exs., 10-V-2005；3exs., 21-V-2005；17exs., 26-IV-2006；9exs., 12-V-2006；1ex., 5-VI-2006；17exs., 4-V-2007；1ex., 16-V-2011. つくば市六斗：3exs., 29-IV-1998；4exs., 5-V-1998；9exs., 6-V-2000；11exs., 29-IV-2001；5exs., 3-V-2003；24exs., 26-IV-2004；19exs., 16-V-2005；1ex., 16-V-2007；3exs., 7-V-2008；1ex., 22-V-2010. つくば市細見：22exs., 15-V-1999；3exs., 10-VII-1999；1ex., 16-V-2008；2exs., 17-V-2010；3exs., 26-IV-2011；3exs., 10-V-2011. つくばみらい市野堀：10exs., 28-V-2005. 守谷市高野稲戸井遊水池：1ex., 10-V-1998. 牛久市新地：2exs., 3-V-1999. 牛久市遠山：14exs., 12-V-2005；1ex., 26-V-2006. 龍ヶ崎市別所町：3exs., 4-V-2006. 以上すべて古巻進採集。

記録は4月下旬から5月下旬に集中している。他の時期にも調査を行っているが本種が確認できたことは少なく、わずかに6月と7月に各1例だけであった。7月10日の2個体は未成熟個体であり、この時期の羽化が示唆される。

イボタノキは北海道から九州にかけての林内や林縁にごく普通に分布する落葉低木で、5月から6月にかけて枝先に花穂をつける。ヒコサンジュウジが数多く採集されるのは、この春先の展葉期から開花時期までの期間で、開花後は葉の傷みもひどくなり本種はあまり見られなくなる。

本種と同属のコルリアトキリゴミムシ *Lebia viridis* は、北米ではカミナリハムシ属の *Altica foliaceae* に外部寄生することが知られている（石谷，2008）。一方，吉田・初宿（2009）は大阪市淀川区からコルリアトキリを記録し，同時にヒメカミナリハムシ *Altica caerulescens* が多数見られたことから，この種への寄生を示唆している。

ヒコサンジュウジの採集時に多く見られるのは，ヒメテントウノミハムシ *Argopistes tsekooni* の成虫であるが，残念ながら本種との関わりについての観察はできなかった。本種が何に依存するかは今のところ不明だが，本種の妙な分布傾向と併せて極めて興味深い。

おわりに

全国的に記録の少ないアトキリゴミムシとして，クロサヒラタアトキリとヒコサンジュウジアトキリのまとまった採集・観察記録を報告した。これらの種は，近縁種の情報・知見などから，食性等の特殊な生態が推察されるが，筆者らの観察力の無さからこれ以上の知見を得ることができなかった。今後の生態解明に少しでも役に立てれば幸である。

クロサヒラタアトキリの産地情報を教えて頂いた田中勇氏にお礼申し上げる。

引用文献

- 土生昶申・貞永仁恵，1967. オオヨツアナアトキリゴミムシの幼虫の記載ならびに生活史に関する若干の観察. *Kontyû*, 34(4)：391-397.
- 石谷正宇，2008. コルリアトキリゴミムシの生態. *昆虫と自然*, 43(12)：24-26.
- 神奈川昆虫談話会，2004. 神奈川県昆虫誌Ⅱ. 836 pp.
- 黒沢良彦，1992. チャドクガの幼虫を捕食するゴミムシ. *甲虫ニュース*, (100)：23.
- 本藤 勝，1984. クワゴマダラヒトリの捕食者オオヨツアナアトキリゴミムシの捕食戦略：餌密度に対する反応および摂食量と成長量の関係. *日本生態学会誌*, (34)：457-466.
- 松本慶一，2000. 御蔵島のゴミムシ採集記録. *東京都の自然*, (26)：3, 東京都高尾自然科学博物館.
- 松本慶一・豊田浩二，1996. ヌバタマノクロアトキリゴミムシの生態的知見. *甲虫ニュース*, (113)：10.
- 森 正人，1997. アリスアトキリゴミムシの生態に関する一知見. *ねじればね*, (76)：8-9.
- 森 正人，2006. 不思議の国のアリスアトキリゴミムシ. *NUE*, (17)：8-10, 環境科学(株).
- 高倉康男，1972. 北九州ゴミムシ類資料(IV). *北九州の昆虫*, 17(3)：63-68.
- 高倉康男，1974. 北九州の注目すべき甲虫類. *北九州の昆虫*, 20(1)：5-9.
- 豊田浩二，2000. アリスアトキリゴミムシとカワラケアリの関係について. *甲虫ニュース*, (127/128)：11-13.
- 上野俊一ほか，1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ). 514 pp. 保育社.
- 吉田浩史・初宿成彦，2009. コルリアトキリゴミムシの淀川河川敷からの記録. *Nature Study*, 55(6)：9.

(森 正人 560-0883 豊中市岡町南1-1-10  
環境科学大阪株式会社)  
(古巻 進 302-0012 取手市井野団地4-10-106)

【短報】ライトトラップに飛来したホソミツギリゾウムシ

ホソミツギリゾウムシ *Cyphagogus signipes* Lewis, 1883 (ミツギリゾウムシ科) は、体長 4.0 ~ 8.0 mm の特異な形態の特徴を有する小型種であり、中国南部および台湾、日本 (本州、九州、対馬、奄美大島) に分布する (森本, 2008)。

本種は、シイなどの広葉樹枯木のキクイムシの坑道に棲むことが知られており (森本, 2008), Sforzi & Bartolozzi (2004) は、小島 (1955) に基づき、オニグルミ (クルミ科) を本種の寄主植物として挙げている。また、宮崎県では、エノキの伐採木からの採集例がある (土岐, 2010)。

全国的に記録の少ない種であり、環境省のレッドデータブックでは「情報不足」、福井県と京都府のレッドデータブックでは、それぞれ「要注目」、「要注目種」とされている。本種の生態には未解明の部分が多く、成虫の走光性に関する情報はこれまでにないようである。

我々は奈良県内の

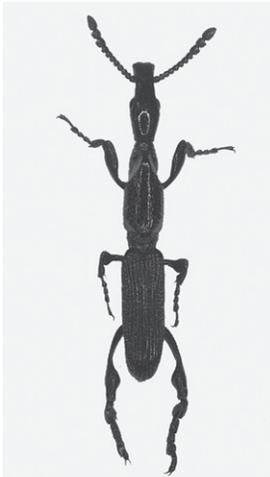


図1. ホソミツギリゾウムシ.

河畔においてライトトラップに飛来した本種の標本を検査する機会に恵まれたので、成虫の習性に関する新知見として記録しておきたい。なお、標本は (独) 農業環境技術研究所に保管されている。

lex. (所蔵昆虫標本番号 24-0475091, 図 1), 奈良県川上村三之公川河畔, 34°15'44"N, 136°04'22"E, 14. VII. 2008, 中谷至伸採集, ライトトラップ。

ライトトラップ設置場所の周辺はアカガシ (ブナ科) などの常緑広葉樹が優占する二次林で、河畔にはオニグルミが点在していた。

引用文献

- 小島圭三, 1955. オニグルミとサワグルミの材を食う虫. げんせい, 4 (1・2): 57-61.  
 Lewis, G., 1883. On Japan Brentidae, and notes on their habits. J. Linn. Soc. London, 17: 295-302, pl. XII.  
 森本 桂, 2008. ミツギリゾウムシ科研究入門 (1) — 概説と日本産の種 —. 月刊むし, (443): 4-16.  
 Sforzi, A. & L. Bartolozzi (eds.), 2004. Brentidae of the World (Coleoptera, Curculionoidea). Monogr. 39. Mus. Reg. Sci. nat., Torino. 974 pp.  
 土岐和多瑠, 2010. 宮崎県におけるホソミツギリゾウムシの記録. 月刊むし, (469): 49.

(吉武 啓・中谷至伸 305-8604 つくば市観音台 3-1-3 (独) 農業環境技術研究所)



Hájek, J., 2011. World catalogue of the family Callirhipidae (Coleoptera: Elateriformia), with nomenclatural notes. *Zootaxa*, 2914: 1-66.

著者は、プラハ国立博物館の甲虫担当の学芸員で、ドロムシ上科の Eulichadidae (日本未記録科) などで優れた論文を多数出している。本論文では、ホソクシヒゲムシ科の世界のカタログを作成した。多くのタイプを検視しており、多くの新結合・新地位を提唱し 4 属群 39 種群の新参異名を新たに認めている。その結果、本科を 10 属 175 種 (亜種を含む) に整理している。本論文により本科の分類学的研究は飛躍的にやり易くなったと考えられる。

日本産種については以下の 4 種がリストアップされている。なお、*Horatocera* 属とされてい

た 2 種については、既に "Catalogue of Palaearctic Coleoptera Vol. 3 (1996)" において *Simianus* 属へ移動されており、ムネアカクシヒゲムシの変異として記載された *Horatocera niponica* var. *galloisi* Pic, 1932 も、単なる色彩変異であるとして新参異名として処理済みである。よって今回の論文では日本産種に関する変更点はないことになる。

オキナワナガクシヒゲムシ

*Callirhipis* (s.str.) *kurosawai* Satô, 1995

ナガクシヒゲムシ

*Callirhipis* (s.str.) *miwai* Nakane, 1985

ムネアカクシヒゲムシ

*Simianus niponicus* (Lewis, 1895)

オオシマクシヒゲムシ

*Simianus oshimanus* (Nakane, 1973)

(愛媛大学ミュージアム 吉富博之)



の方が良いと思う。不要な情報は全てカットされ、有用な情報のみが目に入る。しかも、親切なことに図中に同定の視点が文字で記入されている。この手法は、むし社発行の「BE-KUWA」とか「クワガタムシ大図鑑」などでも使われているが、解説と図を見比べなくてもよいことから、スピーディーな同定が可能となっている。

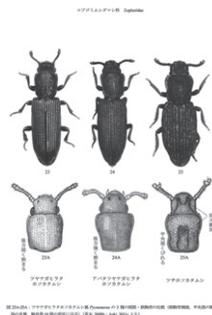
いわば、ほぼ絵合わせだけで、非常に正確な同定ができてしまうのである。「英文が付いていないから外国の研究者には評価されない」なんて言う方もいるかもしれないけれど、日本語が読めなくても日本産ホソカタムシの正確な同定ができる、というのは実にスバラシイことではないか、と思う。

じゃあ、図だけで済ませているか、ということそうではなく、種ごとの詳細な解説のほかに複数の種を有する属にはちゃんと種への検索がついている。シノニミックリスト、4ページもの参考文献、さらには32枚におよぶ「ホソカタムシの住む枯れ木」の写真とその解説、おまけに？青木さん自

身の生態写真や顔写真までついている。

いわば、至れり尽くせりの図鑑なのである。

ただ、僕個人にとっては残念なことがひとつあった。それはオオダイヨコミゾコブゴミムシダマシのアンテナが出ていないことである。この標本は僕が青木さんの「喜寿祝い」に差し上げたものだけど、こういう本に図示されるのなら、ちゃんとアンテナを出した標本を差し上げるべきだった。なにしろ、これ以外の図示標本は全部アンテナがちゃんと出されていたのだ。



(秋田勝己)

定期購読のご案内

昆虫用品は **むし社**

検索

月刊むし

B5判, 56~80頁 毎月20日発売  
定価1200円 (送料100円)

「月刊むし」は、1971年3月に創刊された昆虫専門の月刊雑誌で、30年以上続いて発行されています。過去のバックナンバーの内容はむし社HPをご覧ください。  
<http://homepage2.nifty.com/mushi-sha/>



495号 (2012年5月号)  
2011年の昆虫界をふりかえって

- 蝶界
- 蛾界
- 甲虫界
- トンボ界
- アマチュア界

494号 (2012年4月号)

ギフトチョウ特集号

- ベトナム中部コンツム産マダラインコクワガタの1新亜種

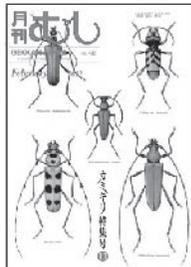
「月刊むし」定期予約購読

本誌は一般書店での販売のほか、定期予約購読も行っております。定期予約の場合、送料は無料で、次のように誌代も割引となりますので、ぜひご利用下さい。

6ヶ月 予約 定価 7200円 → 7000円  
12ヶ月 予約 定価 14400円 → 14000円  
24ヶ月 予約 定価 28800円 → 28000円

お申し込み方法

郵便振替用紙に「月刊むし予約」と明記のうえ、下記の口座あてにご送金ください。  
郵便振替口座 00160-5-159262 むし社  
新規お申し込みは、当月発売分よりとさせていただきます。



493号 (2012年3月号)

- 最近のタマムシ研究 (2)
- 伊豆諸島のカミキリムシ相 (下)
- スラウェシ島産ネプトクワガタの2新種

492号 (2012年2月号)

カミキリ特集号

- 小笠原諸島におけるカミキリムシの最近の知見
- プエラモトコバネカミキリの再発見
- カミキリムシの食樹をめぐって
- もうひとつのノコギリヒメコバネカミキリ再発見記

むし社

〒164-0001 東京都中野区中野 2-23-1-209

Tel. 03-3383-1461~1462

Fax. 03-3383-1467

## お知らせ・会務報告

## 名古屋例会開催のお知らせ

2012年第2回名古屋例会を、下記のとおり開催しますので、ぜひご参加ください。

**日時** 2012年9月2日(日) 午前10時～午後5時

**場所** 三重県環境学習情報センター1階研修室(四日市市桜町3684-11) 東名阪「四日市IC」から車で約15分。駐車場(無料)あり。

## 当日の内容

- 1 情報交換, 同定など(午前10時～12時)
- 2 講演(午後1時～3時30分)
  - (1) 伊澤和義氏「チョッキリ その分類と生態」
  - (2) 保科英人氏「日本産タマキノコムシ概説～特に*Leiodes*属の分類と生物地理について」
- 3 一人一話など(午後3時30分～5時)
- 4 その他
  - (1) 車で来られない方は、近鉄湯ノ山線「大羽根園駅」から、車での乗り合わせの手配をしますので、運営幹事の生川までご連絡ください。
  - (2) 大会終了後は、懇親会も開催いたします。
  - (3) 昼食や飲物は必ず持参してください。



(名古屋例会運営幹事 生川展行 tritoma@mecha.ne.jp Tel 059-374-1054)

## 東京例会開催のお知らせ

2012年第2回例会を下記の通り開催致します。奮ってご参加ください。

**日時** 9月22日(土曜日) 13:00～16:30

**場所** 北沢タウンホール3階ミーティングルーム  
〔連絡先〕東京都世田谷区北沢2-8-18 TEL: 03-5478-8006

〔交通〕小田急線・井の頭線下北沢駅南口徒歩5分  
バス北沢タウンホール(駒沢陸橋～北沢タウンホール)

## 当日の企画

## 1 話題提供

斉藤秀生氏「インドネシアのカミキリムシの多様性」

1993年から現在まで、ほぼ毎年2回のペースで、夫婦+αでのインドネシア訪問で収集したカミキリムシを題材に、18,110の島嶼からなるインドネシアのカミキリムシの多様性について、現地での経験談を含めて話題提供をしていただきます。

## 2 一人一話

長めの話題をお持ちの方は冒頭でお話いただき、その後は、通常の一人一話を予定しています。

※ 例会終了後の17時より懇親会を開催します。とくに事前予約は不要です。

(東京例会運営幹事 高橋和弘 〒259-1217 平塚市長持239-11 E-mail: kazu5@mg.scn-net.ne.jp)



## 大阪秋季例会開催のお知らせ

第6回大阪例会を下記の通り開催いたします。皆様、多数ご参加ください。

日時：2012年9月29日（土）10時～16時30分

場所：大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区長居公園 1-12）Tel. 06-6697-6221

HP: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/> 通用門よりお入り下さい。

プログラム： 10:00～12:00 自由懇談・同定会、大阪例会運営幹事会  
 12:00～13:00 昼食、休憩  
 13:00～13:30 会務報告会・例会事務連絡  
 13:30～15:00 講演  
 15:20～16:30 「一人一話」会  
 17:30～19:30 懇親会（場所：アサヒビアケラー・アベノ）  
 大阪市阿倍野区阿倍野筋 1-5-36 Tel. 06-6641-6282

懇親会会費：4,500円（飲み放題）

講演：「コブヤハズカミキリ族の分子系統解析 ～これからの課題に向けて～」

演者：中峰空氏（三田市有馬富士自然学習センター）

要旨：演者は日本産コブヤハズカミキリ族3属6種のミトコンドリアDNA（mtDNA）の部分配列を用いて分子系統地理学の研究を行ってきた。その結果、セダカコブヤハズカミキリ・ヤクシマコブヤハズカミキリのmtDNAハプロタイプは大きく9系統に分岐することが判明した。またコブヤハズカミキリ属4種ではコブヤハズのみが単系統性を示し、他の3種はマヤサンコブヤハズの系統に含まれた。しかし核DNAの部分配列を用いて解析を行うと4種すべてが単系統性を示し、さらにコブヤハズとフジコブヤハズが、マヤサンコブヤハズとタニグチコブヤハズがそれぞれ姉妹種関係にあることが示された。これら分子系統解析の結果に加え、雄交尾器の内袋形態の比較、コブヤハズとマヤサンコブヤハズの分布境界付近で発見される鞘翅表面の特異な斑紋パターンについても議論する。そして、これからの課題について話題を提供したい。

例会・懇親会の事前の参加申し込みは不要です。当日、例会参加者はお茶代・資料代として200円を徴収いたします。懇親会は当日受け付けます。

年末例会：2012年12月16日（日）講演：稲垣政志氏「糞虫よもやま話」と「標本撮影方法」について

（大阪例会運営幹事 安井通宏）

#### 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒142-0051

東京都品川区平塚2丁目5番8号

郵便振替 00130-4-21129

電話 (03) 5858-6401（ムシは一番）

FAX (03) 3784-6464

（カタログ贈呈）（株）志賀昆虫普及社

#### ◇学会の発行物・バックナンバーの販売委託先◇

昆虫文献 六本脚

〒102-0075 東京都千代田区三番町 24-3

三番町 MY ビル 3階

TEL: 03-6825-1164

FAX: 03-5213-1600

E-mail: [roppon-ashi@kawamo.co.jp](mailto:roppon-ashi@kawamo.co.jp)

URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>

## 日本甲虫学会第3回大会のご案内

日本甲虫学会第3回大会を下記の通り実施いたします。会員の皆様には奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

### 1. 会場 豊橋市自然史博物館

〒441-3147 愛知県豊橋市大岩町字大穴1-238（豊橋総合動植物公園内）  
JR東海道線「二川駅」南口より徒歩6分

### 2. 日程

2012年12月1日（土）

9:00 ~ 12:00	評議委員会, 各委員会, 総会
13:00 ~ 15:00	公開シンポジウム「海浜性甲虫の多様性と進化」
15:00 ~ 16:30	ポスター講演, 同定会
18:30 ~	懇親会

12月2日（日）

9:00 ~ 14:00	口頭講演
14:00 ~ 16:30	分科会

※プログラムは都合により変更することがあります。

### 3. 参加申し込み

参加申し込みは、原則として電子メールにて行ってください。

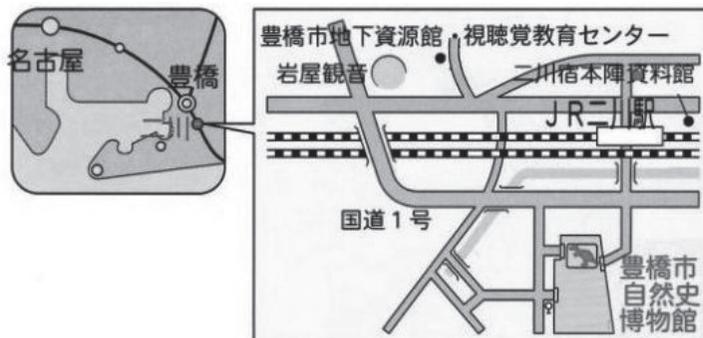
申し込み先電子メール：hasegawa-michi@msi.biglobe.ne.jp

記入内容

- 1) 氏名
- 2) 所属
- 3) 住所
- 4) メールアドレス
- 5) 講演発表の有無
- 6) 懇親会参加の有無

※会場になる豊橋市自然史博物館は、有料公園内の施設となります。お申込みいただいた方には、事前に参加証を送付いたしますので、必ず事前にお申込みください。当日は公園各ゲートで、参加証をご提示してご入園ください。参加証がない場合は、入園料（大人600円）を徴収される場合があります。

※メールでの申し込みができない方は、事務局までファックスまたは郵送でお申込みください。



#### 4. 参加費（※当日受付でお支払いください。）

大会参加費	2,500 円（11月1日以降は 3,000 円）
懇親会参加費	男性 6,000 円（11月1日以降は 8,000 円） 女性 4,000 円（11月1日以降は 6,000 円）

#### 5. 講演発表の申し込み

原則として電子メールにて行ってください。

申し込み先電子メール：hasegawa-michi@msi.biglobe.ne.jp

- 1) 発表の種別 口頭発表・ポスター発表
- 2) 申し込み期限：9月1日
- 3) 講演要旨締切：9月30日

##### <口頭講演発表>

※持ち時間は質疑応答を含めて15分です。時間厳守してください。

※発表資料は原則として、Microsoft PowerPointでファイルを作成して、コンパクトディスク(CD-R)に保存してお持ちの上、会場受付にお渡しください。CDには表に講演番号と発表者氏名を記入し、講演用ファイルのみを保存してください。講演開始までに係員がファイルを立ち上げます。開始後は原則としてご自身でPCの操作をお願いします。（発表時のメディアはCD-Rのみとし、USBメモリー、CD-RW、DVDは不可です。持参したコンピューターをプロジェクターに直接接続することは、トラブルが予想されますのでお断りします。

※発表資料は、必ず、事前に最新のウイルスチェックを済ませたものをお持ちください。

※講演には液晶プロジェクター（Windows版Power Point2007）が使用できます。その他のAV機器の使用については、事務局にご相談ください。

##### <ポスター講演発表>

※掲示するポスターは、原則横90 cm、縦220 cm以内に収まるように作成してください。どうしても規定内に収まらない場合は、事務局にご相談ください。

※作成方法は自由で、掲示は初日から掲示できます。

※ポスター発表会場は、博物館の一般来館者も見学できる場所になりますので、あらかじめご承知おきください。

#### 6. 小集会

申し込み期限：9月1日

講演要旨締切：9月30日

使用できる場所、機材が限られていますので、応募数が予定数を超えた場合は選考させていただきますので、あらかじめご承知おきください。

#### 7. 宿泊等

事務局での宿泊の斡旋は予定しておりません。

#### 8. 大会事務局、お問い合わせ先

日本甲虫学会第3回大会事務局：長谷川道明

〒441-3147 愛知県豊橋市大岩町字大穴 1-238 豊橋市自然史博物館

電話 0532-41-4747 ファックス 0532-41-8020

hasegawa-michi@msi.biglobe.ne.jp

## 目次

## ■解説

松田 潔：日本産ベニボタルの同定マニュアル, III ... 1

## ■論文

- 鈴木 互：日本産ピロウドコメツキダマシ属の3種について ..... 7
- 平野幸彦・青木淳一：ヒラタコメツキモドキの採集記録とその分布 ..... 13
- 亀澤 洋：房総半島におけるヒラズイソアリヅカムシの記録とその生息環境について ..... 20
- 亀澤 洋・松原 豊：東京都多摩川で採集したケシマルムシ属の1種について ..... 25
- 小島弘昭・森本 桂：琉球列島のシマトネリコで見つかった *Pimelocerus* 属（コウチュウ目，ゾウムシ科，アナアキゾウムシ亜科）の2種 ..... 28
- 小島弘昭：山形県飛鳥のゾウムシ上科甲虫相 ..... 31

## ■短報

- 田中 稔：ヒラノコギリホソヒラタムシの徳之島からの記録 ..... 6
- 鈴木 互：鹿児島県喜界島で採集されたアマミヒゲコメツキ ..... 12
- 保科英人：日本産陸生ガムシ類の学名変更について... 15
- 稲畑憲昭：感潮域からホンシュウセスジダルマガムシを採集 ..... 16
- 大平仁夫：愛媛県面河溪から新種として記載された *Anostirus* 属のコメツキムシ ..... 17

- 岩田朋文・岩田泰幸：埼玉県におけるマルドロムシ科の追加記録 ..... 18
- 亀澤 洋：ヒラタカクヒメエンムシの一採集例 ... 23
- 吉武 啓・土岐和多瑠：フトミツギリゾウムシの日本からの追加記録 ..... 24
- 秋田勝己・高桑正敏：日本産ハナノミ族数種の記録 30
- 日下部良康：神奈川県におけるルリカミキリによるセイヨウベニカナメモチへの加害例 ..... 35
- 亀澤 洋：房総半島におけるツツイキバナガミズギワゴミシの発見 ..... 36
- 新井浩二：ハイマツマキムシモドキを奥秩父で採集 37
- 森 正人・古巻 進：アトキリゴミムシ類の生態に関する覚書き ..... 38
- 吉武 啓・中谷至伸：ライトトラップに飛来したホソミツギリゾウムシ ..... 41

## ■書評・出版物・論文紹介

- 「Tshernyshev (2011, 2012)」 ..... 34
- 「Hájek (2011)」 ..... 41
- 「日本産ホソカタムシ類図説 ムキヒゲホソカタムシ科・コブゴミムシダマシ科」 ..... 42

## ■お知らせ・会務報告

- 名古屋例会開催のお知らせ ..... 44
- 東京例会開催のお知らせ ..... 44
- 大阪秋季例会開催のお知らせ ..... 45
- 日本甲虫学会第3回大会のご案内 ..... 46

## \*\*\*\* 2013・2014 年度の会長および評議員選挙のお知らせ \*\*\*\*

日本甲虫学会の役員の任期は2年と定められており（会則第8条）、今年度は改選期にあたります。つきましては、会長ならびに評議員の選挙を実施します。8月公示，9月開票を予定しておりますので、ご承知おきいただければ幸いです。

（選挙管理委員長 小島弘昭）

## さやばね ニューシリーズ 第6号

発行日 2012年6月30日  
次号は2012年9月下旬発行予定  
発行者 新里達也  
編集者 吉富博之（委員長），谷角素彦，小島弘昭，  
奥島雄一，中峰 空，片山雄史  
発行所 日本甲虫学会  
〒305-0005 つくば市天久保4-1-1  
国立科学博物館動物研究部  
電話 029-851-5159

原稿送付先（さやばねニューシリーズ）  
〒790-8566 愛媛県松山市樽味3-5-7  
愛媛大学農学部環境昆虫学研究室 吉富博之  
電子メール：hymushi@agr.chime-u.ac.jp  
印刷所 原印刷株式会社  
年会費 一般会員8,000円（前納制）  
学生会員5,000円（前納制）  
郵便振替口座番号 00880-2-190472  
ホームページ <http://kochugakkai.sakura.ne.jp/>